

「幻の安土城」復元プロジェクト・歴史セミナー



安土城復元研究の過去・現在・未来

プログラム

(1) 第1部 安土城天主の復元研究

10:30~11:15 「安土城天主復元研究史」 木戸雅寿（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課参事員）

11:15~12:15 「安土城天主復元の最新研究」 中村泰朗（広島大学大学院助教）

12:15~13:15 休憩

(2) 第2部 天主復元の資料

13:15~14:15 「安土山図屏風調査の現状」 新保淳乃（武蔵大学講師・安土図屏風探索プロジェクト）

14:15~14:35 「文献資料にみる安土城天主」 松下浩（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主幹）

14:35~14:55 「昭和の天主跡発掘調査成果」 仲川靖（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課副主幹）

14:55~15:15 「平成の天主跡発掘調査成果」 岩橋隆浩（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主幹）

15:15~15:25 休憩

(3) 第3部 パネルディスカッション

15:25~16:30 「安土城復元研究の過去・現在・未来」

パネラー：中村・新保・岩橋・仲川 コーディネーター：木戸・松下

日時：令和5年（2023）3月25日（土） 10：30～16：30

会場：コラボしが21 滋賀県大津市打出浜2-1

主催：滋賀県（文化スポーツ部文化財保護課）

発行日：令和5年（2023年）3月25日

編集・発行：滋賀県文化スポーツ部文化財保護課

〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目1番1号

TEL077-528-4678 FAX077-528-4956 E-Mail castle@pref.shiga.lg.jp

URL <https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/bunakasports/bunkazaihogo/>

「安土城天主復元研究史」

～ 復元をどう考えるのか ～



滋賀県 参事員 木戸 雅寿

I 復元される天守

よく知られている復元天守の分類

- ①現存天守・・・・・・12城(国宝5、重文7)⇒本物
- ②外観復元天守・・・戦中空襲に遭ったものが多い。(コンクリート)⇒偽物
- ③復興天守・・・・・・かつて存在したが、資料がなく想像で建てた
(コンクリート・木造)⇒偽物
- ④模擬天守・・・天守風建物。最も多い。あったかどうか分からない。
あるいは無かったと分かっているのに建てた。
歴史とは関係なく行政として建てられている。⇒偽物
- ⑤文化庁が言うところの復元天守・・・文化庁の基準を満たすもの。(木造)
⇒1/1 模型展示

①現存天守

かつては二百ほどあったが、今や十二城しかありません。

「彦根城」の世界遺産的な価値でいうと、これらの城は全て平和な時代の戦いを知らない天守たち。いま、あらたに観光シンボルとして求められています。

②外観復元天守

外側は前と同じだが、鉄筋コンクリートで造られた近代的なもの。戦前まで現存していたものが多い

(例)

- 名古屋城天守 愛知県名古屋市 (1957) 空襲
- 大垣城天守 岐阜県大垣市 (1958) 空襲

広島城天守 広島県広島市 (1958) 空襲
 和歌山城天守 和歌山県和歌山市(1958) 空襲
 松前城天守 北海道松前市 (1960) 火事
 会津若松城天守 福島県会津市 (1965) 廃城令
 岡山城天守 岡山県岡山市 (1966) 空襲
 福知山城天守 広島県福山市 (1986) 廃城令

③復興天守(木造・コンクリート)

天守があったのはわかっているが史料が全く残っていない 想像で建てたもの。

(例)

大坂城天守(大阪府大阪市 1931)、岸和田城天守(大阪府岸和田市 1954)、岐阜城天守(岐阜県岐阜市 1956)、岡崎城天守(愛知県岡崎市 1959)、小倉城天守(福岡県北九州市 1959)、小田原城天守(神奈川県小田原市 1960)、岩国城天守(山口県岩国市 1962) 島原城天守(長崎県島原市 1964)、福山城天守(広島県福山市 1966)、越前大野城天守(福井県大野市 1968)、高島城天守(長野県諏訪市 1970)、忍城天守(埼玉県行田市 1988)、高田城天守(新潟県上越市 1994) 尼崎城天守(兵庫県尼崎市 2018)

④模擬天守

天守風建物と呼ばばよいか。あったかどうか分からない。無かったと分かっているのに建てた。歴史とは関係なく、創造でつくられている。展望台や施設が多い。まったくの偽物。

洲本城 兵庫県洲本市(1928)
 郡上八幡城 岐阜県郡上市(1933)
 伊賀上野城 三重県上野市(1935)
 富山城 富山県富山市(1954)
 吉田城 愛知県豊橋市(1954)
 浜松城 静岡県浜松市(1958)
 平戸城 長崎県平戸市(1962)
 中津城 大分県中津市(1964)
 伏見桃山城 京都府京都市(1964)
 横手城 秋田県横手市(1965)
 撫養城 徳島県鳴門市(1965)
 唐津城 佐賀県唐津市(1966)
 三戸城 青森県三戸町(1967)
 小牧城 愛知県小牧市(1968)
 杵築城 大分県杵築市(1970)
 天神山城 埼玉県秩父郡長瀨町(1970)
 神岡城 岐阜県飛騨市(1970)
 涌谷城 宮城県遠田郡涌谷町(1973)
 中村城 高知県四万十市(1973)
 大多喜城 千葉県夷隅郡大多喜町(1975)
 騎西城 埼玉県加須市(1975)
 日和佐城 徳島県海部郡美波町(1978)
 江美城 鳥取県日野郡江府町(1978)
 久留里城 千葉県君津市(1979)
 今治城 愛媛県今治市(1980)

川島城 徳島県吉野川市(1981)
 上山城 山形県上山市(198施設が多い。)
 館山城 千葉県館山市(1982)
 因島水軍城 広島県尾道市(1983)
 五城目城 秋田県南秋田郡五城目町(1984)
 長浜城 滋賀県長浜市(1985)
 綾城 宮崎県東諸県郡綾町(1985)
 川之江城 愛媛県四国中央市(1986)
 山方城 茨城県常陸大宮市(1987)
 小山城 静岡県榛原郡吉田町(1987)
 岩崎城 愛知県日進市(1987)
 茶臼山城 岡山県赤磐市(1988)
 稲庭城 秋田県湯沢市(1989)
 清洲城 愛知県清須市(1989)
 久保田城 秋田県秋田市(1989)
 羽衣石城 鳥取県東伯郡湯梨浜町(1990)
 一郷山城 群馬県多野郡吉井町(1990)
 墨俣城 岐阜県大垣市(1991)
 月山日和城 宮崎県都城市(1992)
 天ヶ城 宮崎県宮崎市(1993)
 関宿城 千葉県野田市(1995)
 小倉山城 岐阜県美濃市
 常盤城 福島県田村市
 逆井城 茨城県坂東市
 竜泉寺城 愛知県名古屋市
 旭城 愛知県尾張旭市
 湯浅城 和歌山県有田郡湯浅

※ちなみに、よく本とかでみるイラストレーターや画家による「イラスト」、「パース」、「2次元CG」などは、まさに「絵に描いた餅」なので復元研究という観点からは論外です。世の中には、商業ベースで多数氾濫しているのが現状。これらはすべて絵空事の世界。学生から、在野の研究者まで。城郭マニアなどが多い。これ自体を否定する気はない。学問、言論の自由、楽しみとしての成果。ただし学術研究の中では意味をなさない。ただし、現実性の無いこれらは、真実性を混乱させていることは否定できない。

◎これらを整理するために、文化庁は遺跡として歴史的建造物を復元する場合のガイドラインを整理しました

- ・遺跡に関係ない所に立てるものについて問題はない。
- ・安土城は特別史跡=国宝であるため、このガイドラインにそわなければならない。国の許可がある。そのハードルはとても高い。

文化庁が定めている基準

「史跡等における歴史的建造物の復元の取扱い基準」8つの条件

(『史跡整備のてびき』P257)

- ①当該史跡等の保存にとって支障とならないもの
- ②当該史跡等の活用にとって積極的な意味を持つもの
- ③当該史跡等の理解が誤りなく適切に導かれるもの
- ④当該史跡等の歴史的・自然的な風致、景観と総体として整合する内容を持つもの
- ⑤構造及び設置後の管理(防災・防犯を含む)の観点から、安全性が確保されているもの
- ⑥復元した建造物等を施設として利用する場合には、当該史跡の保存と活用に関わりがあり、かつ当該史跡等にふさわしい内容をもつもの
- ⑦当該史跡等の保存・整備・活用に関する全体的な意義が策定され、その中で①～⑥に関する方針が明確にしめされているとともに、復元後の建造物等の保存・管理のための行政措置等の方針が整っているもの
- ⑧復元しようとする歴史的建造物等の位置、規模、構造、形式等について十分な根拠があるもので、文化庁との協議を踏まえ、史跡等における歴史的建造物等の復元の取扱いに関する専門委員会(文化審議会・復元検討委員会)の審査を経たもの。
 - ・⑧をみたすため外観、内観、構造などがわかる絵図や写真等、学術的根拠のあるもの
 - ・建築にあたっては、遺跡を破壊しないこと、伝統的技術による木造建築であること。
 - ・バリアフリーは不可。
 - ・内部での展示施設、便益施設(トイレや休憩所など)、売店などは不可
 - ・建築基準法、消防法を満たすこと。

『史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準(令和2年4月17日)』

新たなに整理された区分

「再現」(史跡全体の価値の理解に資する再現)とされてきたものを、

「復元」(往時の規模・構造・形式を忠実に再現したもの) ☞文化庁の言う復元

「復元的整備」(利活用の観点から、外観を忠実に再現しつつ内部の意匠・構造の一部を変更して再現、もしくは往時の意匠・形態が一部不明確な場合構造等について一部変更する場合)
☞名古屋城がトライしようとしている。

「その他の再現」(「復元」、「復元的整備」以外の再現)
☞復興天守、外観復元

の三つに分類する。

「適切な再現といえない再現」

(意匠・形態が全く分からないもの、調査により意匠・形態等に関する史資料発見の可能性があるに関わらず、その作業が明らかに不十分なものなど、史跡全体の理解に資さない再現)
☞模擬天守はすべてこれに当たる



⑤木造復元天守

文化財などの手法による復元。平面図、立面図や側面図などの詳細建築図面などの史料や古写真などに基づいて、無くなる前のものに忠実に再現したもの。

(例)

白川小峰城天守	福島県白河市	(1991)
白石城天守	宮城県白石市	(1996)
新発田城天守	新潟県新発田市	(2004)
大洲城天守	愛媛県大洲市	(2004)

チャレンジ中

名古屋城天守 愛知県名古屋市 (???)

予備軍

高松城、盛岡城、江戸城、広島城、小田原城、駿府城

これだけしかない。いずれも指図や当時の模型、写真がある。

◎ 復元(往時の規模・構造・形式を忠実に再現)するための必要な根拠

- ・位置、規模、構造、形式等について十分な根拠があるもの
- ・それを満たすための外観、内観、構造などがわかる絵図(指図)や写真等、学術的根拠のあるもの提示する必要



安土城の残されたわずかな資料。復元に当たって必要な四項目。

- ①現地(天主台発掘調査の資料)
- ②文献資料(『信長公記』『天主之次第』、フロイス『日本史』等)
- ③安土山図屏風⇒行方不明
- ④写真⇒あるわけではない。

Ⅱ 安土城天主復元研究史

さて、I で見たような文化財としての復元の位置づけと、これまでの城郭における天守の復元の現状を踏まえたうえで、現在までの安土城天主復元研究の歩を振り返ってみようとおもいます。

研究史には、画期とその時代ごとの考え方が反映されています。

- ◎安土城天主の復元ブームは、周期的にやってくる
それとともに、復元案が増え、また、安土城の調査が進んで行く

幾つかの画期

- ◎江戸時代・明治時代：復元という発想がない。
- ①昭和5年～15年頃：復元が視野に入るが、情報がない。
・・・H16の天主発掘に至る
- ②昭和33年～：ある事件をきっかけとする。
・・・S35～47の調査に至る
- ③昭和49～59年：内藤昌氏が「天守指図」を発見したことに端を発する
・・・S49～58の調査に至る
・・・H1～21の調査に至る
- ④平成31年：三日月知事が復元PJを提唱。・・・R5～の調査に至る

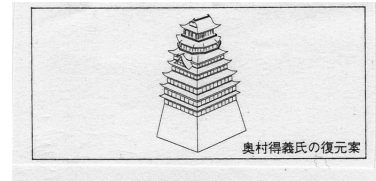
①江戸・明治時代の復元

奥村徳義 郷土史家 『金城御古録』

安政五年(1858)

鷗雨(嵩碕品山写) 絵師 『安土城図』

明治二十九年(1896)

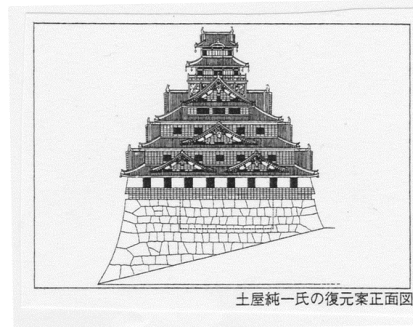


土屋純一 建築家 大正九年(1921) ・各階の平面図のみ

①昭和5年～15年頃

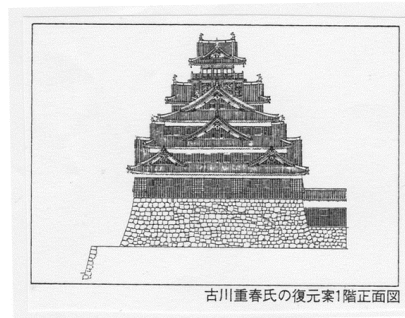
土屋純一 建築家 昭和五年(1930)

- ・各階の平面図、外観立面図のみ
- ・天主台の調査が行われる以前のため礎石配置と合わない。
- ・建てることは不可能。



古川重春 建築家 昭和十一年(1936)

- ・各階の平面図、外観立面図
- ・天主台の調査が行われる以前のため礎石配置と合わない。
- ・建てることは不可能。



天主台の構造がわからないということで、復元案の作成が難しいと判断。



結果、昭和15・16年に滋賀県が天主台の発掘調査を実施することとなった。

②昭和33年(S15天主台発掘調査以後)

渋谷五郎 小河建築設計事務所、技師部長 大工大講師、技師長

設計監理 小河建築設計事務所

顧問 名古屋工業大学 工学博士 城戸 久

- ・昭和三十三年(1058)十一月
- ・各階の平面図、外観立面図、天主台、礎石配置と一致している。
- ・柱は鉄筋コンクリート、壁はモルタル、窓はガラスサッシ、中央に見学者用の螺旋階段とエレベーターを設置、屋根は塗瓦として復元。
- ・利用目的は「郷土的及戦国時代の歴史的資料の陳列場となし他に学術講演場、地方青年会館、家族娯楽場を設置し常に健全

なる国民思想の滋養に資せんとす。」「其の竣工をみれば東海道中の旅客をなぐさめるのみならず一度下車してこれを展覧すれば、信長の進歩的思想と祖国愛の熱情を搦んで浮華輕桃の青少年を反省せしめ、外人をこれを見れば 400 年の昔既に日本国中にきわめてすぐれたる先覚者を発見すべく、一般国民をして亦偏狭なる封建思想の愚を反省せしめ得べし」
「我等は現時代各地に行われつつある城郭ブームに浮かれたる一辺の郷愁的復古調に雷同するものに在らざるなる」（『安土城址天守閣復原趣意書』）

時としては画期的な案であったが、「とある事件」で頓挫します。
結果として、文化庁から建設の許可が下りなかった。今も昔も許可が下りない内容。

◎昭和 33 年の現状変更事件

- ・西武グループの堤康次郎氏が安土城の復元を夢見て、安土城を買収しようとした事件です。
- ・麓から山頂までロープウェイを造ろうとし、麓の土地を実際を買収しました。
- ・天主をコンクリートで復元し、本丸御殿跡にホテル。麓には鉄道を引こうとしたということです。
- ・特別史跡 (T5 史跡、S27 特別史跡) であった安土城内でのロープウェイ設置と天主復元計画を文化庁は許可しませんでした。当時国会でもこのことが議論 (議事録が公開されている) され大問題となりました。
- ・計画は頓挫。麓の土地は平成に滋賀県が公有化、今のように整備しています。
- ・この時、頓挫したロープウェイが、近江八幡山城へ移転し、今も使われています。近江八幡山城は指定候補となりながらも未だ史跡に指定されていません。

ここであらたに内藤昌氏が発見した「天守指図」という江戸期の資料を使用して、内藤昌氏が新しい案を「国華」という雑誌に発表。研究に風穴を開けました。

それに反論する形で、翌年、同じ「国華」という雑誌で宮上茂隆氏が案を発表され、内藤案を批判されました。

「天守指図」

宝暦年間～明和年間(1751～1763) 池上家所蔵「天守指図」(静嘉堂文庫蔵)
この史料を内藤先生は、安土城との当時の姿を示す資料だとして発表され、これを元に内藤案が提案されました。

ただし、宮上氏を筆頭に、この資料については、資料として課題、問題点が多々あり。否定的な考え方を持つ研究者もいます。

③昭和時代の復元 (S15の天主台発掘調査以後・『天守指図』発見以降)

内藤 昌 名古屋工業大学(建築家) 昭和四九年(1974)

- ・各階の平面図、外観立面図、構造図がある。
- ・天主台、礎石配置と一致。
- ・大きな特徴は「天守指図」をそのまま復元している点で、記録に無い、吹き抜けや張り出し能舞台などの斬新なデザインとなっている。

宮上 茂隆 当時東京大学(建築家) 昭和五二年(1977)

- ・各階の平面図、外観立面図、構造図
- ・天主台、礎石配置と一致。
- ・一回り小さい
- ・内藤案を下敷きに批判する形で提案
- ・穴蔵の中に立てるという特徴。

当時、滋賀県も内藤案を最終案だと考え、是で復元ができるものと考えていた。

そして、時の武村正義知事が、昭和54年7月、第一回の近畿サミットが大阪で開催された時に、「近畿はまさに日本の心のふるさとであり、この地域は文化財の宝庫でもある。歴史の中で破壊された文化遺産を今日に活かすために文化的公共投資が必要ではないか。かつて『天下とりの城』といわれた大阪城はすでに復元されそれを現代に生かしている。本物の安土城や羅城門を復元することにより新しい近畿の創造を考えてはどうか」と提言した。

いざ復元となると問題が山のようにあった。

文化庁からは、安土城跡は国の特別史跡であるため、よほど確かな資料が無い限り、復元の許可は出来ないといわれた。

復元案の学説がわかれているようではだめ、学術的に一つに決着するように。そのためにも、屏風を探すように。そして、幻の安土山図屏風を探し求める口

一マへの旅が始まる。それは今も続く遠く険しい道のりである。

結局、昭和 54 年から続いた天主復元への道は、昭和 63 年度の議会で費用対効果が無いということで予算を打ち切られる。

何をしているのかと、文化庁よりお叱りをいただく。

復元よりは、補助金を付けるので、安土城の価値を高め、将来に継承していくことに力を注ぐべきだとされ、調査・整備・研究を進めるようにと指導される。

安土城郭調査研究所を設置し、7名(建築・文献・造園・考古4)を配置し、20年10億で調査整備を実施した。

嘉田前知事の「もったいない」の財政構造改革で規模縮小から研究所と事業廃止に至る。

◎平成の大修理、調査・整備・研究の開始

平成元年(1989) 平成の大修理。調査・整備を開始する。伝羽柴秀吉邸跡の調査

平成 2年(1990) 伝羽柴秀吉邸跡の調査、伝大手道跡の調査

平成 3年(1991) 伝前田利家邸跡の調査、伝大手道跡の調査

平成 4年(1992) 環境整備工事に着手する。

平成 5年(1993) 大手口跡の調査。

平成 6年(1994) 旧摠見寺跡の調査。

平成 7年(1995) 百々橋口道跡の調査、主郭周回路の調査

平成 8年(1996) 搦手口道跡の調査、伝米蔵跡の調査

平成 9年(1997) 搦手口道跡の調査、伝台所跡の調査

平成 10年(1998) 搦手口道跡の調査、天主台跡周辺の調査

平成 11年(1999) 本丸跡の調査

平成 12年(2000) 天主跡の調査

平成 13年(2001) 大手口跡周辺南面の調査

平成 14年(2002) 大手口跡周辺南面の調査

平成 16年(2003) 大手口跡周辺南面の調査、蓮池周辺から伝江藤邸跡の調査

平成 17年(2004) 大手口跡周辺南面の整備

平成 18年(2005) 南面内堀周辺の調査

平成 19年(2006) 大手口から百々橋口間の南面の調査

平成 20年(2007) 大手口から百々橋口間の南面の調査



⑦ 平成時代の復元(S15の天主台発掘調査以後・『天守指図』発見以降)

兵頭与一郎 城郭研究者 平成二年(1991)

- ・ 外観パースのみ
- ・ 建てることは不可能
- ・ 宮上案を下敷しているか

石原守 一級建築士 平成十二年(2000)

- ・ 外観パースのみ
- ・ 建てることは不可能。
- ・ 信長が夢枕に立ち、真実の姿を教えられたとのこと

佐藤大規 当時広島大学院生。現愛媛大学 平成十七年(2005)

- ・ 外観立面、各階平面、建築立面
- ・ 学術論文あり
- ・ 屋根瓦がなぜか赤いのが特徴。

中村泰朗 広島大学院生 (現広島大准教) 令和三年(2021)～ 新化中

- ・ 外観立面、各階平面、建築立面
- ・ 学術論文あり

◎平成31年～ 三日月知事、「幻の安土城」復元プロジェクト スタート

現状の安土城跡は特別史跡であり、復元の方向性・方法については多角的に幅広い観点から検討する必要がある。そのため、まずはその魅力を広く発信することで、安土城への関心を高め、機運を醸成するとともに、安土城の実像を明らかにし、あらためて復元の方向性・方法を検討することとした。

令和5年度から、天主北面の調査整備をスタートさせる予定。

☞復元に向けて新たな資料の発見となるか

- ・ 信長が建てた天主は唯一無二のはずなのに、建築学史的に、城郭史的に決着のつかない論争となっている。
- ・ 誰かの説を支持すると、誰かが反論し、抗議される。
- ・ 復元案は、個々個人の一つの作品として扱われる。
- ・ 建築考証のないイラストや想像図は建築から見ると受け入れられない。
- ・ 文化財的には、城の天主だけが大切なのではない。

- ・安土城は本丸全体の形と構造が、戦国時代において先駆的で、近世の先駆けとなる、城郭史のエポックであり画期的。天主だけが価値があるのではない。
- ・復元したい。観光、経済振興・まちづくりの核となるという言葉はよく聞く。
- ・当時の姿を見てみたいという気持ちもわかる。それだけで安易な復元で決着してよいという理由にはならない。
- ・復元は、ある意味「現代人のエゴ」だとも言われている。
- ・安土城の調査研究は100年たっても、すべてを解決できたわけではない。これからも引き続き、調査研究を継続していくことが必要である。

振り返ると、安土城の調査・研究の100年は、常に天主の復元を夢見ることを契機として、復元への願望→調査→研究→整備という循環の中で進んできた。どこまで進んだか。

私たちが求めていることは、歴史におけるたったひとつしかない真実の姿である。

そのために、これまで多くの研究者がアプローチしてきた。それは、今もこれからも飽きなく続いていくと思う。

お わ り

【より詳しいことをお知りになりたい方へ】

- 2003.12 木戸雅寿 『よみがえる安土城』歴史文化ライブラリー167 吉川弘文館
- 2004.2 木戸雅寿 『天下布武の城・安土城』新泉社
- 2007.3 木戸雅寿 「天主から天守へ」『信長の城・秀吉の城』サンライズ出版
- 2007.3 木戸雅寿 「安土城天主研究史を考える ―考古学の見地から―」
『考古学論究 -小笠原好彦先生退任記念論集-』刊行会
- 2017.8 木戸雅寿 「安土城「天主」の復元は、どこまで可能なのか」『信長研究の最前線②
まだまだ未解明な「革新者」の実像』歴史新書 y No.073 洋泉社
- 2021.3 木戸雅寿 『天守指図』の謎 ―安土城天主をめぐる― 十六世紀史論叢 第14号
- 2021.9 木戸雅寿 「天下人の天主・天守―信長・秀吉から家康へ―」十六世紀史論叢 第15号

安土城天主の最新研究

広島大学 中村泰朗

発表の内容

- ①安土城天主：中村案の骨子 ②天主復元の考え方

①安土城天主：中村案の骨子

復元の史料

- ◎発掘調査で知られる天主の情報
昭和の調査と平成の大調査 現存する天主台石垣の配置・勾配
- ◎文字で残された天主の情報
『信長公記』に記された天主の部屋割り 外国人宣教師たちが見た天主の様子
- ◎類例となる住宅建築・城郭建築
平面構成や構造などを復元の参考にする 松江城天守・三原城本丸広間など

安土城天主：中村案

- ◎上記の史料および類例となる建築に基づいて復元
- ◎一階から三階 金碧障壁画で飾られた書院造の部屋
四階 障壁画が飾られていない屋根裏階
五階 仏堂風の八角形平面 「八角、四間ほと有」
六階 正方形の望楼 「三間四方、御座敷之内皆金」
- ◎建物が穴蔵の直上に位置する 一階の北側には付櫓状の土蔵 内部に「本柱」

天守のタイプ

- ◎望楼型天守 ～旧式～
大きな入母屋造の建物を基部としてその上に望楼（物見）をのせたもの
⇒松江城天守・丸岡城天守など
- ◎層塔型天守 ～新式～
上階に向かって規則正しく平面が遞減する 入母屋造の屋根は最上階のみ
⇒宇和島城天守・弘前城天守など

望楼型天守の構造的欠陥

- ◎基部と望楼部との間で通減が大きい
- ◎通減が大きくなると…
 - 屋根の立ち上がりが高くなる 上階が下階の屋根によって覆われる
 - ⇒窓を開くことが困難となる 望楼型天守の構造的欠陥
- ◎中村案における三階の出窓は同階の採光を考慮したもの

②天主復元の考え方

天主復元の手順

1. 現存する天主台遺構を基に天主台上端の平面を復元
2. 『信長公記』の記述を基にして天主各階の部屋割りを復元
3. 類例となる建物を参考にして断面や立面の構成を復元

『信長公記』の内容

- ◎部屋の広さ 障壁画の画題 部屋の場所や機能など
- ◎復元史料として情報量は少なくない ※他城の事例と比べた場合

天主の「部屋割りパズル」

- ◎「十二畳敷、御絵有、花鳥の間と申也」
 - ピースの形状＝「十二畳敷」 ピースの模様＝「花鳥」
- ◎畳数だけで部屋の形状が特定できない パズル全体の外枠の形状が分からない

穴蔵の構造的意義

- ◎穴蔵地表面に大きな礎石を設置する 礎石の上に一間間隔で土台を敷き並べる
- ◎土台 現代で言えばコンクリートのベタ基礎 大重量をバランスよく地盤に伝える
- ◎礎石1個あたりに掛かる重量が2・3割減 礎石同士の不同沈下を防止する
- ◎頑丈な岩盤層＋一間ごとに並ぶ太い土台 ⇒ 天守の巨大な重量を支える仕組み

天主台と建物の構成

- ◎穴蔵地表面のすぐ近くに頑丈な岩盤層 周囲は土層もしくは盛土
- ◎部屋が配された部分の広さ(三階を参考に)≒穴蔵の広さ
 - 天主の「部屋割りパズル」を考える パズル全体の外枠の形状≒穴蔵の範囲
- ◎安土城天主において部屋が配された部分 穴蔵とほぼ同大かつ穴蔵の直上にあった
- ◎天主台上端平面を復元すると北側が広くなる ⇒ここには付櫓状の土蔵

今後の研究に向けて

残された主な研究課題

◎穴蔵中央の穴跡(中央ピット)

仏教的なものを入れた?? 掘立の大柱を立てた痕跡??

◎礎石表面に残された痕跡

柱を立てた痕跡?? 土台を敷いた痕跡??

★今回の発表で紹介した安土城天主中村案は、あくまで復元案の一つにすぎません。安土城天主に関する研究資料は活字化・図面化されているものが多く、大学などに所属する研究者でなくとも、手に入れることが比較的容易です。中村案を叩き台の一つとして、皆さんもご自身の復元案を考えてみてください。現代人の叡智を結集して、信長が残した歴史上の課題に挑戦してみませんか？

主な参考文献

- ・木戸雅寿『よみがえる安土城』歴史文化ライブラリー167、吉川弘文館、2003年。
- ・中村泰朗「安土城天主に関する復元的考察(その一)一階から三階までの部屋割り」『建築史学』第76号、2021年。 【ネットで無料閲覧可能】
- ・中村泰朗「安土城天主の地階床下に関する考察(その1)礎石表面の痕跡について」『日本建築学会中国支部研究報告集』第46巻、2023年。
- ・中村泰朗「安土城天主の地階床下に関する考察(その2)穴蔵中央の穴跡について」『日本建築学会中国支部研究報告集』第46巻、2023年。
- ・三浦正幸『図説近世城郭の作事』天守編、原書房、2022年。

図版出典

- ・発表で使用した天守の図面
『日本建築史基礎資料集成』城郭Ⅰ、中央公論美術出版、1978年。
- ・安土城跡の発掘調査に関する図面
『特別史跡安土城跡発掘調査報告』12、滋賀県教育委員会、2002年。
『特別史跡安土城跡発掘調査報告書』Ⅱ、滋賀県教育委員会、2009年。
- ・その他の図面・写真 発表者による作図&撮影

「安土日記」天正七年正月二十五日条より抜粋

御殿主ハ七重、悉黒漆也。御絵所皆金也。高サ十六間々中。天正五丁丑八月廿四日柱立。同霜月三日屋上葺合候。

上一重、三間四方、御座敷之内皆金、外輪ニ欄干有。柱ハ金也、狭間戸鉄黒漆也。三皇、五帝、孔門十哲。商山四皓、七賢、狩野永徳ニかゝせられ。

二重目、八角、四間ほと有、外柱ハ朱、内柱皆金也。釈門十大御弟子等かゝせられ、尺尊御説法之所。御縁輪ニハ餓鬼共鬼共をかゝせられ、御縁輪のはた板ニハしやちほこひれうかゝせられ候。かうらんきほうし有

三重目、御絵ハなし。南北の破風に四畳半之御座敷両方在之、こやの段と申也。

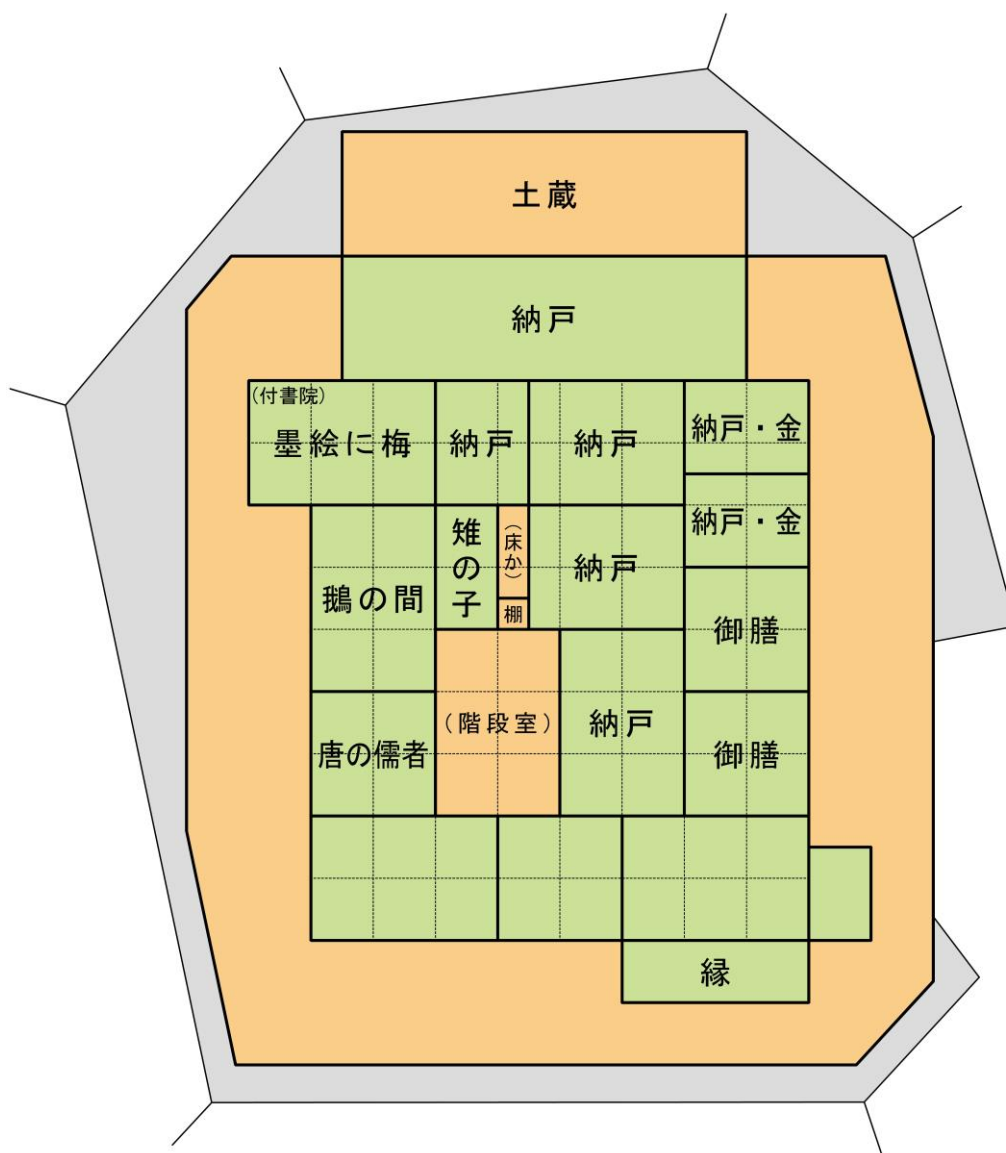
四重目、西十二間ニ岩ニ色々の木を被遊、則岩之間と申候。次西八畳敷ニ龍虎之戦有。南十二間、竹之色々被遊、竹間と申候。次十二間、松計を色々披遊候。東八畳敷、桐ニ鳳凰。次八畳敷、きよゆう耳をあらへは、そうほ牛を牽き帰る所、両人之出たる古郷之躰。次御小座敷七畳敷、でい計也。御絵ハなし。北十二畳敷、是ニ御絵ハなし。次十二畳敷、此内西二間之所ニてまりの木を披遊候。次八畳敷、庭子之景気也。御鷹の間と申也。

五重目、十二畳敷、御絵有、花鳥の間と申也。別ニ一段四畳敷、御座之間有。同花鳥之御絵有。次南八畳敷、賢人間、へうたんより駒の出たる所有。東麝香之間、八畳敷。十二畳、御門之上。次八畳敷、ろとうびんと申仙人杖なけ捨たる所。北廿畳敷、駒の牧之御絵有。絵のふりたる所、是ふゑつの図と申。次十二畳敷、せい王母の御絵有。西御絵ハなし。御縁二段ひろ縁なり。廿四畳敷之御物置の御なんと有。口に八てう敷之御座敷在之。

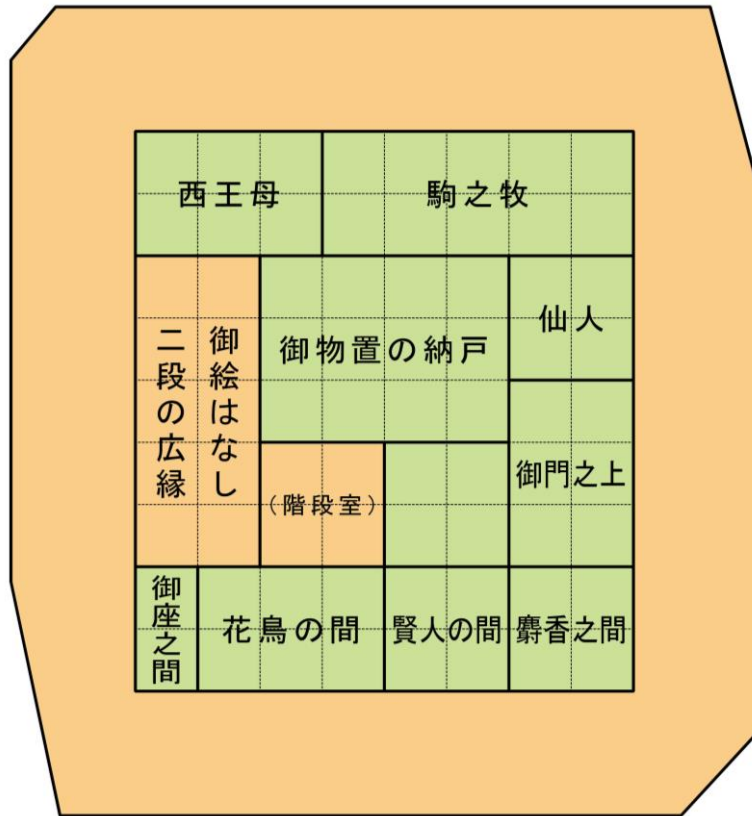
六重目、十二畳敷、墨絵ニ梅之御絵を被遊候。同間内御書院有。是ニ遠寺晚鐘景気被書、まへに盆山被置也。次四てう敷、雉の子を愛する所、御棚ニ鳩計かゝせられ。又十二てう敷ニ鵝をかゝせられ鵝の間と申也。又其次八畳敷、唐の儒者達をかゝせられ、南又十二てう敷、又八てう敷、東十二畳敷、御縁六てう敷、次三てう敷、其次八てう敷、御膳を拵申所、又其次八畳敷御膳拵申所、六てう敷、御南戸、又六畳敷、何も御絵所金也。北之方御土蔵有。其次御座敷廿六畳敷、御なんと也。西六てう敷、次十七てう敷、又其次十畳敷、同十二畳敷、御なんとの数七つ。此下ニ金灯爐つらせられ候。

七重目、以上、柱数二百四本。本柱長さ八間、本柱ふとさ一尺五寸四方、六寸四方、一尺三寸四方木。狭間戸数戸六十余有。何れも鉄ニ黒漆也。

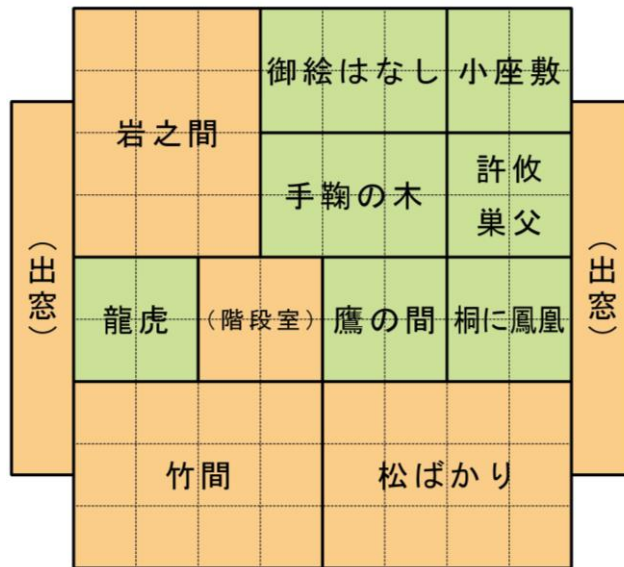
七重之御構、高く青漢の内に挟ミ、棟梁遙に秀て、四面之椽悉金物有。瓦のこくち金銀を以てみかき、ひうちほうちやくをつらせられ候。白霧之間ニ挑、金銀空に輝き、詞にも難尽筆。御大工岡部又右衛門、御普請奉行ハ木村二郎左衛門、漆師首ハ刑部、白金屋首ニ宮西興六、瓦ハ唐様に、唐人之一官ニ被仰付被焼候。瓦奉行小川孫一郎、堀田左内、青山助一也。御細工請取く数多在之、致見物生前思出、忝次第中々申ハ愚候。



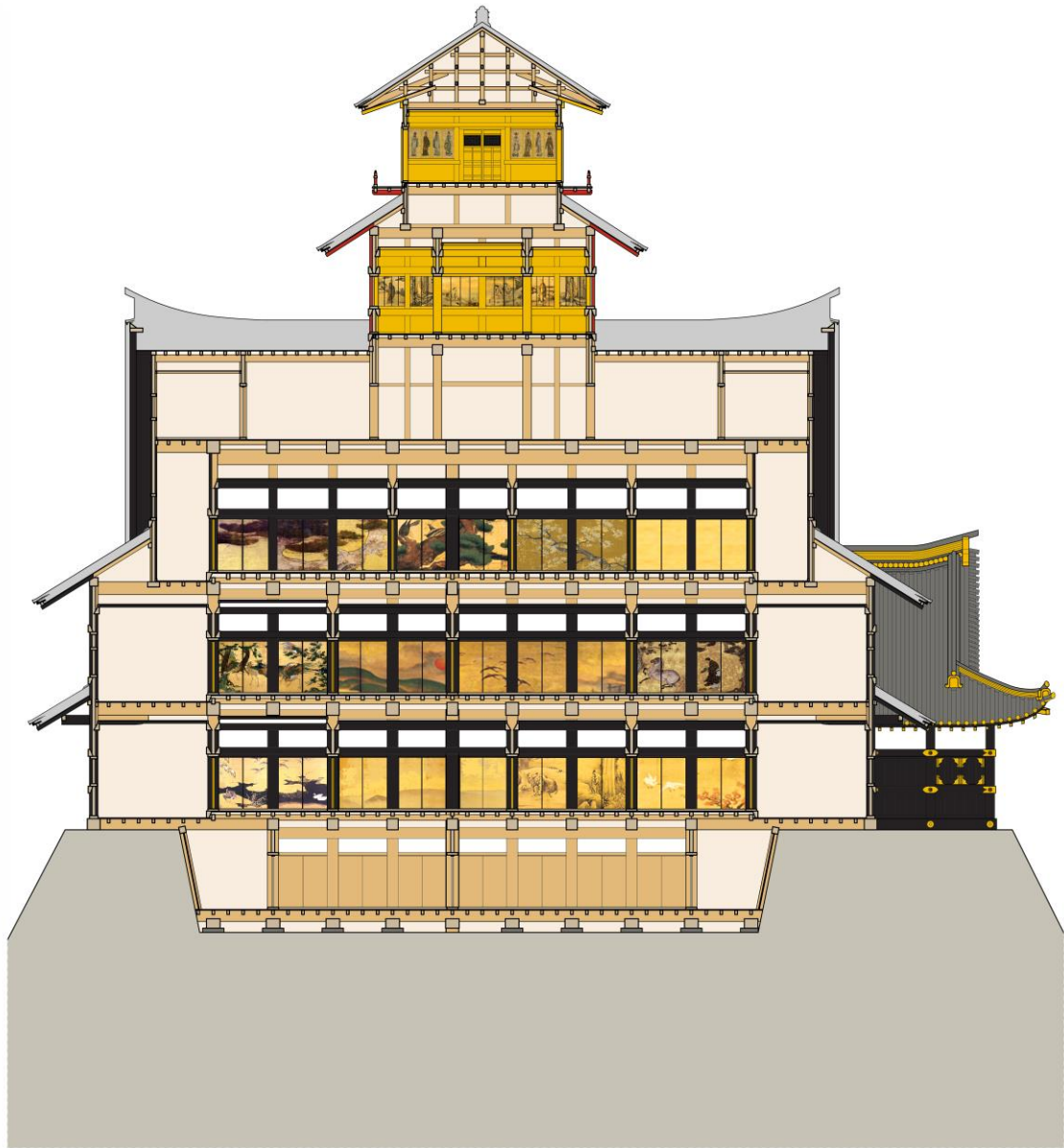
安土城天主復元一階平面図 【中村案】



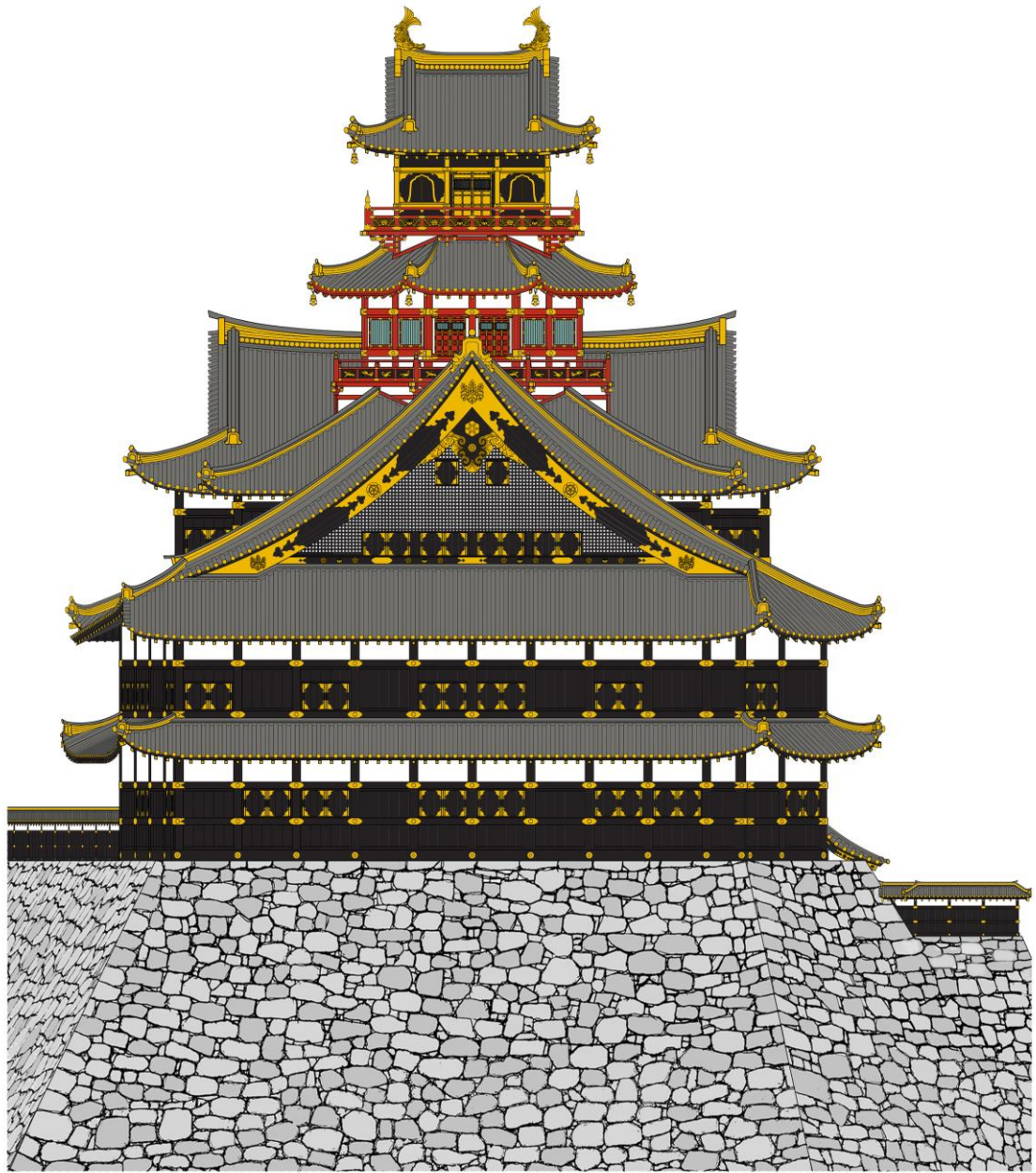
安土城天主復元二階平面図 【中村案】



安土城天主復元三階平面図 【中村案】



安土城天主復元断面图(南北轴) 【中村案】



安土城天主復元南立面圖 【中村案】

安土山図屏風調査の現状

新保淳乃(安土山図屏風探索ネットワーク・ASRN)

■安土山図屏風探索の意義

- ・1582年に焼失した安土城の視覚記録として高い歴史的価値をもつ
- ・日本美術史上最も華麗な織豊期を代表する絵師・狩野永徳の真筆作品として国宝級の価値をもつ
- ・信長がイエズス会巡察師ヴァリニャーノに贈り、天正遣欧使節(1582-90年)によりローマ教皇グレゴリウス13世に献上。16世紀後半の東西文化交流を象徴、西欧世界に日本を知らしめた重要な物証。

I. 安土山図屏風探索ネットワーク(ASRN)

1. 安土町の屏風探索事業

2004年～旧・安土町政策推進課による屏風探索プロジェクト開始

パオラ・カヴァリエーレ安土町文化交流員(当時)

★グレゴリウス13世の末裔ブオンコンパーニニルドヴィージ家にて

《伊東マンショ、メスキータの肖像》素描2点発見 →長崎歴史文化博物館が購入

2007年1-2月安土町がローマとバチカンに学術調査団を派遣(2009年報告書刊行)

若桑みどり 新保淳乃 パオラ・カヴァリエーレ

2008年安土町事業としてパオラ・カヴァリエーレによるイタリア現地調査



■2007年1-2月ローマ、バチカン現地学術調査[若桑、新保、カヴァリエーレ2007]

①屏風に関する記録の調査

1585年3月30日付ウルビーノ公国外交官報告書(BAV, Urb. Lat. 1053, f. 145v.)

1585年3月23日バチカン教皇宮殿・王侯の間 日本の使節は教皇グレゴリウス13世に公式謁見

「たいへん大きくたいへん薄い紙(scorza d'arbore)の上にとくさんの豪華な建物で飾られた彼らの首都の似姿が描かれているもの、籐の文台、華麗な細工で飾られた小机などを贈った」

◆バチカン教皇庁秘密文書館・教皇庁図書館・ローマ国立古文書館

教皇庁財政管理記録、教皇個人の財産目録を探す

グレゴリウス13世財産目録、相続人ソーラ公1612年目録精査 →該当記録なし

1750年 タージャ『教皇宮殿描写』 →記載なし

*1585年3月23日-30日の間に教皇宮殿に置かれ、1750年以前に教皇宮殿から移動か

◆ローマ・イエズス会古文書保管所

イエズス会宣教師報告書・屏風に関する一次資料の収集

②屏風の所蔵先の調査

◆教皇宮殿物品庫(フロレリア・ヴァティカーナ)収蔵目録1592-1758年精査 該当記録なし

◆教皇庁博物館古文書館:物品管理5役職の目録1585-1630年精査 該当記録なし

③屏風の図像の調査

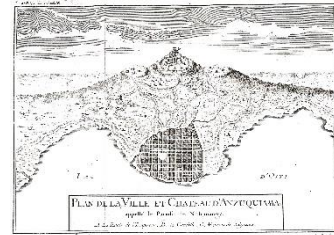
・ピニョリア編著、『カルタリ「古代人の神々の真の姿」』第2部

(1615年の改訂版・1624年ヴェネツィア刊)の挿図

「フィリップ・ウインゲルミオ(=フィリップス・ファン・ウインゲ)は、断崖の上に建てられた日本の神々の寺院を、一枚の紙に素描した。また彼はこれが、日本の大使らが教皇グレゴリウス十三世に献上するために持ち来たった複数の絵画から抜き出したものと語った」



・イエズス会士シャルルヴォワ『日本国の歴史と概況』パリ、1736年挿図に「安土山の都市と城」版画掲載



◆アルマジア『バチカン記念物記録』1955年

フランドル出身古物研究家フィリップス・ファン・ウインゲ(1560-1592.8)による

1592年7月13[15]日付書簡と地図素描を発見。

「困難のすえ許可を得て今日の午前中に画廊に入り、猛暑の中を2時間立ったまま

オルテリウスのために(地図の画廊にある)ラツィオの地図を模写した」 ラツィオ地図模写→



*ウインゲは同年8月フィレンツェに移動、直後に急死

⇒屏風は1592年7月中旬までバチカン教皇宮殿内「地図の画廊」に存在した!?

地図の画廊(Galleria delle carte geografiche):バチカン宮殿ベルヴェデーレ西翼4階

1581-83 グレゴリウス13世の命で建造 地理学者エグナツィオ・ダンティ監督



④ 屏風はいつ地図の画廊から移動されたか

◆ローマ国立古文書館 バチカン教皇宮殿会計簿

地図の画廊の5回にわたる修復事業が判明

1592-1596(クレメンス8世) 1630/7-1637/11(ウルバヌス8世)

1647/4-1650/7 1720 1803-1884

*1590年代と1630年代の修復記録を精査し、修復工事の規模や内容を確認した結果、画廊から移動された可能性が高いのは1592年夏、1630年夏と推定

★2007年現地学術調査の成果

-1585年3月30日以前に屏風がバチカン教皇宮殿内の画廊に置かれた

-1592年7月13日に「地図の画廊」に入ったファン・ウインゲが屏風を模写

-1750年までの間に画廊から屏風が移動された

-教皇庁倉庫には屏風の記録確認できず

-1592-96年、1630-37年に画廊の大規模工事があった *画廊から移動と推定

2. 安土図屏風探索ネットワーク(ASRN)

2016年 現代美術家・杉本博司による新プロジェクト始動

目的:《安土山図屏風》追跡調査・発見、天正遣欧使節の活動と近世東西交流史の複眼的研究

2017年 安土図屏風探索ネットワーク(ASRN)結成

杉本博司 相原玄(杉本スタジオ)、パオラ・カヴァリエーレ(大阪大学)、新保淳乃

マーク・アードマン(メルボルン大学)、アントン・シュヴァイツァー(九州大学)

- ・現地調査員 太田智子、エリアン・ルー
 - ・アドバイザー 橋本麻里、山本英男、千田嘉博、シルヴィオ・ヴィータ、藤川真由
 - ・後援・協力 近江八幡市安土町、八木正自
- クラウドファンディング、杉本スタジオ、八木正自氏からの資金提供にて現地調査を実施

■現地調査

- 2017年6月 バルベリーニ家文書調査(太田)
- 2018年2-3月 バチカン所蔵資料調査(ルー、太田)
- 2018年7月 バチカン宮「世界地図の間」予備調査(ルー)
- 2018年12月-2019年1月 東洋学者ネットワーク調査(ルー)
- 2018年12月 ペーレスク書簡調査(太田)
- 2019年5月 教皇宮殿文書・教皇出身家系文書調査(太田)
- 2019年夏 ローマ・パドヴァ東洋学者ネットワーク調査(ルー)
- 2021年冬 バチカン宮「世界地図の間」その他調査(ルー)



■活動報告・公開シンポジウム

- 2018年10月6日 MOA美術館
- 2018年11月18日 近江八幡市西の湖ステーション
- 2019年1月 長崎県美術館
- 2019年4月5日 杉本×千田対談@ロンドンギャラリー
- 2019年6月29日 安土コミュニティセンター
- 2021年2月 九州大学国際シンポジウム『「南蛮人」を越えて』パネル報告
- 2021年11月13日 バチカンと日本100年プロジェクト東京シンポジウム
- 2022年1月29日 ここ滋賀歴史セミナー(東京)
- 2023年2月4日 近江八幡市安土城復元推進協議会・講演会

II. 安土山図屏風の現在地：安土図屏風探索ネットワーク調査と成果 2017-20

■調査I：安土山図屏風の所蔵先追跡

◆2017年6月：太田@バチカン図書館(BAV) [太田 2017]
2007年の調査結果を踏まえ、推定所蔵先のうち教皇出身家系の財産目録を調査

★推定所蔵先

- ① 教皇を輩出した家系のコレクション
- ② 教皇宮殿の収蔵庫
- ③ 外交贈答品としてバチカンの外へ流出
- ④ イエズス会のローマ学院に保管された可能性

歴代ローマ教皇と出身家系

- グレゴリウス13世(1572.5-1585.4)：ボンコンパーニ家
- シクストゥス5世(1585.4-1590.8)：ペレッティ=モンタルト家
- クレメンス8世(1592.1-1605.3)：アルドブランディーニ家
- パウルス5世(1605.5-1621.1)：ボルゲーゼ家
- グレゴリウス15世(1621.2-1623.7)：ルドヴィージ家
- ウルバヌス8世(1623.8-1644.7)：バルベリーニ家

★成果

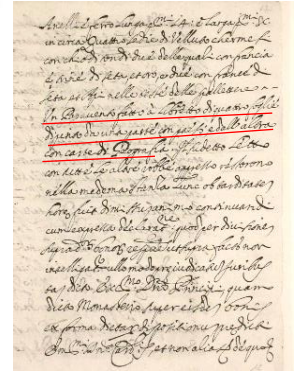
1679年フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿の没年作成の財産目録
[BAV, Archivio Barberini, Indice II, 2447]

f.12r

“Un paravento fatto a libretto di quattro foglie
dipinto da una parte con paesi, e dall'altra con carte di geografia”
「一方には風景が描かれ、他方には地図が描かれた四面から成るリブレット型の衝立一点」



Cfr.狩野光信《肥前名護屋城図屏風》
桃山時代、六曲一隻 佐賀県立名護屋城博物館



◆2018年2-3月:太田、ルー@バチカン[太田、ルー2018]

バチカン内・外に安土山図屏風が移動された痕跡の追跡
1679年フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿財産目録に記録された「衝立」の継続調査
バチカン美術館収蔵庫、バルベリーニ宮コレクション、アルドブランディーニ家財産目録の調査

★結果

フランチェスコ枢機卿生前の財産目録、遺産相続人財産目録に記載なし
→枢機卿は1649-1679年の間に屏風を取得した可能性

◆2019年5月:太田@バチカン[太田2019b]

- ①バチカン教皇宮殿の動産目録、出納記録
バチカン枢密文書館(ASV):1726年フロレリア管理者作成のバチカン・クイリナーレ教皇宮殿財産目録、教皇庁会計院出納簿
ローマ国立古文書館(ASR):1587-1620年教皇宮殿内教皇所有物、フロレリア目録
- ②パウルス5世出身ボルゲーゼ家文書の動産贈与記録
ASV:Fondo Borghese serie IV 73 bis;Archivio Borghese 456,457,458,7506
- ③1679年フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿所蔵屏風の継続的調査
BAV:枢機卿書簡史料 Barb.lat.6463,6467,6468
- ④シクストゥス5世出身ペレッティ家文書
ASR+カピトリノ古文書館(ASC):1587-1655年後継者の遺言書、財産目録
- ⑤イエズス会史料調査
イエズス会古文書保管所(ARSI):バルトリ『日本史』原稿、素描、誓修院貴重品目録

★結果

対象史料に安土山図屏風の痕跡なし 1726年以前に教皇宮殿外に移動/逸失か

■調査2:安土山図屏風の設置場所の再検討

◆2018年2-3月・7月:太田、ルー@バチカン[太田、ルー2018]

グレゴリウス13世が安土山図屏風を置いた「Galleria廊下」を、
教皇居室に近い「世界地図の画廊 Galleria della Cosmografia」と見なす仮説を検討

★屏風の設置場所に関する同時代の証言

アレッサンドロ・ヴァリニャーノ『天正遣欧使節記』（1590年）

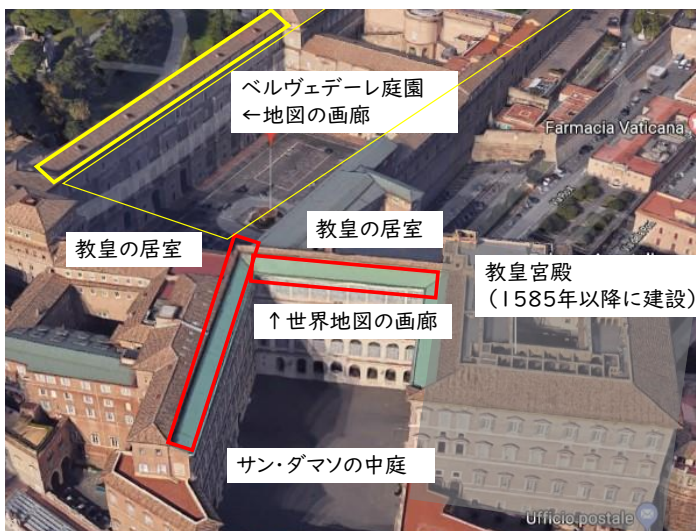
「[...]その後、我々はガッレリアと呼ばれる廊下に通された。これは大変心地の良い庭園へと続く教皇の私用通路である。[この庭園は]その美しさゆえに、すなわち素晴らしい眺望ゆえにベルヴェデーレ [=展望台]と呼ばれている。[...]多くの装飾が施されたこの場所に、教皇は安土山を描き表わした板絵を設置するよう命じた。私どもの贈り物が粗末に扱うべきものではない品々に比肩するものであることを示すためである。」

グイド・グアルティエーリ『天正遣欧使節記（ローマ到着からリスボン出発までの日本人使節に関する報告）』（1586年）

「[...]彼[教皇]ご自身が先導しながら、使節達を自らの諸居室へと案内し、数点の祈祷の品々を見せた。それから長く大変美しい画廊の扉までご自身で使節達をお連れした。これは教皇ご自身が造営させたもので、多様な都市や国々を表す巧妙なる絵画で飾られていた」

ルイス・フロイス『1582年ローマにおける日本の使節』（1582-1592年）

「4月3日、教皇は謁見を行なった[...]。祈りを捧げた後、教皇は立ち上がり、彼らを自らの居室へと導き、信仰の品々を見せた後、大きな開廊の扉口へと連れて行った。ここには教皇自身が世界中の都市や国々を表す大変豪華で卓越した絵画を描かせていた。[教皇は]彼らがゆっくりと全てを堪能できるよう侍従ビアンケット氏に任せた。さらに、教皇は自らの寝室を彼らに見せた」。



フランチェスコ・バルバツァ、フランチェスコ・パニーニ
サン・ダマソの中庭と教皇宮殿の景観図
(1765年、スタンフォード大学図書館蔵)
★4階「世界地図の画廊」

◆「世界地図の画廊」装飾

第一期：1563-64年（ピウス4世時代）

西翼—スペイン、フランス、イタリア、ギリシア、小アジア、聖地、ドイツ、ハンガリー、その他

第二期：1583年（グレゴリウス13世時代）

北西端—ヴァノジーノ、円形の世界地図の制作

第三期：1584年12月—1585年12月（グレゴリウス13世、シクストゥス五世時代）

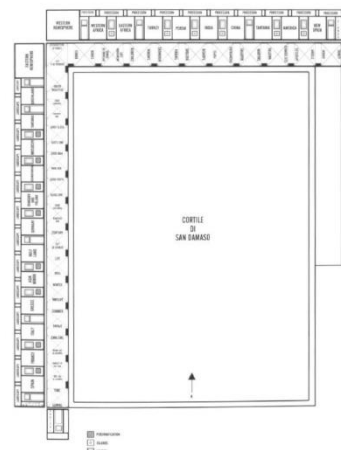
北翼—アフリカ、アジア、アメリカ、トルコ、インド、中国、日本、その他

*地理学者イニャツィオ・ダンティ考案の12点の地図と都市図

制作者への最終支払記録 1585年12月23日

タージャ『バチカン宮殿の描写的記録』ローマ、1750年、p. 236（1712年頃執筆）

「北翼10番目のアーチの下に日本地図が描かれていた」 ⇒ 1870年代修復・再装飾



★結果

- 「世界地図の廊下」はグレゴリウス 13 世居室に近く、ベルヴェデーレ庭園とも階段で連絡
 - 教皇庁内の「Exotica(異国・異教の事物)」収蔵区画の一部
 - 同廊下は半戸外
 - 屏風の献上と展示に関する同時代史料間に齟齬
- エステ枢機卿宛報告書 1585.3.25、「ローマ報告 Avvisi di Roma」1585.3.30
:1585.3.24 教皇庁にて謁見・献上と記載
- テオドシオ・パニツァ書簡 1585.4.5(伝聞に基づく同時代記録)
:1585.4.4 教皇との私的謁見と「世界地図の廊下」案内時に献上



ヘンドリック・ホルツィウス原画

ヤコブ・マータム翻刻

《フィリップス・ファン・ウインゲ肖像》1592

アムステルダム国立美術館

■調査3:フィリップス・ファン・ウインゲと東洋学者ネットワーク

◆2018年12月—2019年1月/2019年夏:ルー@バチカン、ローマ、ミラノ
[ルー2019; ルー2020]

- ウインゲによる安土城/屏風の素描または複製に言及した歴史資料を精査
- ウインゲの人的ネットワークを通じた素描の共有・複製・活用を確定
- 素描原本とファン・ウインゲ手稿に関する先行研究を精査
- 素描・手稿探索の手がかりを検討

1. フィリップス・ファン・ウインゲ手稿の行方

- 1586-1592.7 ファン・ウインゲ ローマ滞在中の研究成果を手稿に残す
:自身の関心に基づく異教古代・初期キリスト教文化遺構研究
:在アントワープ地理学者・地図製作者オルテリウスとの協働による地図・服飾最新情報収集
ex.中国、メキシコ
- 1592.7 バチカン宮殿地図の画廊その他で模写
- 1592.8 フィレンツェで死去
- 1624 ピニョリア編カルターリ第二部『インドの神々の姿』ファン・ウインゲの素描に基づく木版画を掲載(安土山図屏風、ケツアルコアトル神像)

2. 安土山図屏風素描を含むファン・ウインゲ遺品の移動

ジャン・ルルーによる遺品送付

- ①「重量品」(大理石等) 1594.4 ローマ発—ミッテルブルク着(仏革命・WWIIで破壊)
- ②書籍等 1597.10 以後ヴェネツィア発—オルテリウス受領—1597/98 トウルネ着
アントワープ:オルテリウス 1597 受領、ジェロームに送付*一部手稿を保管か
トウルネ:兄ジェローム①兄弟の遺産をトウルネ大聖堂寄贈
②友人・学者に寄贈 ex.ベルギー王立図書館(KBR)ms17872-73

3. 蒐集家・学者サークルにおけるファン・ウインゲ手稿の共有・複製・活用

:ファン・ウインゲ生前~17世紀初頭

キリスト教考古学、古代ギリシア・ローマ・中東、「新インド」研究

*ファン・ウインゲと共同研究 生前~死後に手稿を複製・活用

ローマ、教皇庁:ジャン・ルルー(マカリウス)、アロンソ・チャコン、アントニオ・ボシオ

アントワープ:オルテリウス

4. 東洋学者ネットワークにおけるファン・ウインゲ手稿の共有・複製・活用

:ペーレスクを核とする「人文学者・書簡の共和国」

エクサンプロヴァンス:ニコラ=クロード・ファブリ・ド・ペーレスク(1580-1637)

トゥルネ:ジェローム・ファン・ウインゲ、ドニ・ド・ヴィリエ、ジャン=ジャック・シフレ

パドヴァ:ガルド、アレandro、ピニョリア、メルクリアレ

ローマ:ガルド、ピニョリア、アレandro、メネストリエ

1607 ペーレスクがトゥルネ訪問

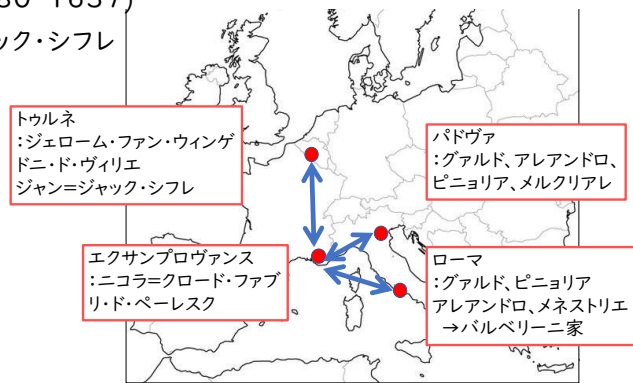
1612/8/30 ペーレスク→ジェローム宛書簡

ファン・ウインゲ「手稿」(KRB)の複製完成後原本返送の予定別のファン・ウインゲ手稿貸出の要請

1616/1 ペーレスク→ピニョリア宛書簡

安土山図屏風の素描を含む東洋事物の複製提供の意向

1623 ペーレスクからジェロームに手稿返却



BAV, Vat.Lat. 10545
ファン・ウインゲ画帳の複製

ピニョリア
『インドの神々の像』1624~



ファン・ウインゲ手稿
ペーレスク複製・提供

BAV, Codex Rios

安土城山屏風スケッチを
含むウインゲ手稿X?



ケツアルコアトル像

「日本の神殿」



◆2018年12月:太田@南仏カルパントラ、アングンベルティーヌ図書館[太田 2019a]

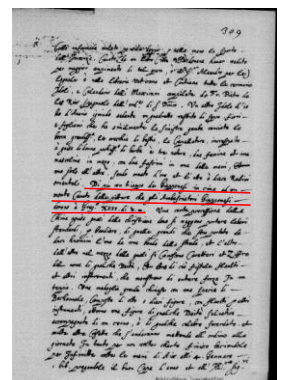
1616年1月4日付ペーレスクからパドヴァのピニョリア宛書簡

ペーレスク文庫[Ms1875, f.308r-309v]

f.309r "Di più un tiempro de' giapponesi in cima ad un monte cavato dalle pitture che gli ambasciatori giapponesi derono a Gregorio XIII di b(eata) m(emoria)." 「日本の使節らが教皇グレゴリウス 13 世に献上した絵画から写し取られた、山の頂上に建つ日本[人]の寺院」 =ウインゲによる安土山図屏風の一部模写

★調査結果

- 1616年1月4日付ペーレスク書簡の原文を確認、先行研究の誤りを修正
- 書簡で言及された日本の絵は、ファン・ウインゲのスケッチとほぼ断定可
- 中国の物品を詳細に描写、屏風絵からの模写については極めて簡潔
- Ms1875 所収の他の書簡には日本・安土城・屏風関係の記述なし



*スケッチには「寺院」しか描かれていなかった可能性が高いことを示唆

ベルギー王立図書館蔵ウイング手稿の日本関連記事が「グレゴリウス 13 世は、セミナリヨとコレジオを(…) 在位2年に日本の安土に、在位2年に日本の有馬に、在位2年に日本の府内に創設。また在位2年にイエズス会のノビシアド(修練院)を日本の白杵に創設」のみだった場合、ピニョリアに送った素描が日本の使節が教皇に献上した品の模写であること、山の頂上にあった寺を表していたことをペーレスクが理解するには、別の情報源(ウイングが素描に付したメモ?)があったと推測できる。

◆2018年冬、2019年7-9月:ルー@ミラノ、ローマ、バチカン[ルー2019;ルー2020]

第二世代の東洋学者ネットワークにおける「東洋」「インド」情報の流通

パドヴァのピネッリ周辺+ローマのバルベリーニ周辺の調査

■パドヴァの東洋学者サークル

①ジローラモ・メルクリアーレ(1530-1606)

イエズス会保護者アレッシンドロ・ファルネーゼ枢機卿の侍医・側近

1569-87年パドヴァ大学医学教授

ピネッリと交友、パドヴァ司教コルネルの侍医

1585年4月(使節のパドヴァ訪問2カ月前)ヴェネツィアで刊行された天正遣欧使節来訪記を献上される



②ジャン・ヴィンチェンツォ・ピネッリ(1535-1601)

人文主義者・植物学者・書誌学者・収集家 パドヴァ・サークルの中心

死後、蔵書・史料の大部分はフェデリコ・ボッロメオ枢機卿が買い取り、ミラノのアンブロジアーナ図書館に収蔵



★成果 ピネッリ旧蔵・未刊行史料を発見 Bibl.Ambrosiana, msD490

f.90r. 1585年3月30日ローマ通信

「インドの王たち(天正使節)は全体に鍍金され装飾の施された木の小机、日本王国の2つの重要な都市の様子を道路と建物をすべて描いた杉材でできた2点の板絵、救世主が描かれた非常に美しく、布で装飾された書き物机を携えてきた。日向・有馬・都の王の名において教皇様に献上する品々である。

公開枢機卿会議でも、彼らは日本にある豊後の王からの書簡を贈った。極薄の木の皮に記された書簡は、彼が老齢とうち続く戦のため自ら来訪できなかったことを詫びる内容だった。」

fols.95rv-96r: 1585年3月23日ローマのイエズス会士からの報告書簡

バチカン宮王侯の間での公開枢機卿会議での謁見に参列、式典中に使節から教皇へ屏風絵が贈呈された。

f.91v. 1585年4月6日ローマ通信

「同日(日曜)カピトリノーで9人のローマ・コンセルヴァトーレが教皇の前で宣誓を行い、正餐が開かれた。インドの王たちも招かれ、ポポロ・ロマーノから絹の衣服を贈られた。木曜日に彼らから教皇に上述の品々が渡された。」

★成果 天正遣欧使節がローマに携行した外交贈呈品の特定

[BAV, Urb.lat.1053; BA, D 490, f.90r; P 251 sup.]

教皇グレゴリウス 13 世

：安土山図屏風、救世主が描かれた布張りの文台、漆器の硯箱、「サイの角」の杯

ローマのバローネ、枢機卿

：技巧を凝らした造りの祭壇布、「鍍金され」「装飾された」蒔絵細工の小机、漆器の硯箱、「サイの角」状の杯（ファルネーゼ枢機卿に贈呈）、着物、刀剣、傘など

■ローマの東洋学者サークル

①フルヴィオ・オルシーニ（1529-1600）

ピネッリ親友、ローマのファルネーゼ家に仕えた書誌学者・古物収集家・図学者

ファルネーゼ家古物コレクション管理者

フィリップス・ファン・ウィングのローマ滞在中（1589-92）頻繁に交流し古物への関心を共有



②パオロ・グアルド（1553-1621）

1585年叙階、使節のパドヴァ訪問に立ち会い

1590年ローマ教皇庁請願長官

1591年パドヴァ帰還、コルネル司教の保護

1607年ピネッリ伝記出版

1602, 1606-09, 1614-15年パラヴィチーニ枢機卿のもとローマ滞在 建築、古物・美術品、中国文物に関心

*パドヴァとローマの東洋学者を仲介する役割



③ロレンツォ・ピニョリア（1571-1631）

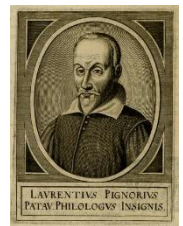
1601年トゥルネ訪問

1605-7年コルネルに随行しローマ滞在

パドヴァでもローマのバルベリーニ・サークルと交流継続

*1607年グアルド宛書簡：シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿所有の日本文物に言及

カルタリー『古代の神々の像』第二部「東西インドの神々」編纂に際し、東洋学者ネットワークを通じて「中国、日本、ビルマその他」の神像図像を収集。同1624年版に、ペーレスクから提供されたファン・ウィングの安土山図屏風素描（の複製）に基づく「日本の寺院」掲載。



④ジローラモ・アレアンドロ Jr.（1574-1629）

パドヴァ大学でピニョリアと同窓

1604年～ローマ、オッタヴィオ・バンディーニ枢機卿（布教聖庁創設推進者、東洋関係管轄）の秘書官

マッフェオ・バルベリーニ枢機卿（1623-ウルバヌス8世）と長年の友人

1610年頃～バルベリーニ家「家臣団」

1623年フランチェスコ枢機卿ラテン語秘書官

教皇の外交文書作成、アロンソ・チャコン『ローマ教皇・枢機卿伝』を継承し1630年出版



*東洋学者ネットワークのローマ拠点として人的交流・情報共有を仲介

*極東、「両インド」宗教に関する図像・資料を収集 ⇒蔵書をフランチェスコ枢機卿に遺贈

ex.ローマのイエズス会他所蔵の「日本の偶像（仏像）」図像をピニョリアに提供

*バルベリーニ家外交・芸術保護を通じ、画家ルーベンス、プッサンと交流、東洋情報を提供

Ex.ルーベンス

《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡》1617/18 ウィーン美術史美術館
:アントワープのイエズス会聖堂主祭壇



Ex.ニコラ・プッサン

《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡(鹿児島島の信徒の娘の蘇生)》1641ルーヴル美術館
:パリのイエズス会修練院のため建造物局総監サブレ・ド・ノワイエ注文



III. 今後の課題と展望

【安土図屏風探索プロジェクト・調査報告書】

- 若桑みどり、新保淳乃、パオラ・カヴァリエーレ『安土町政策推進課事業 2006年安土町屏風絵探索プロジェクト報告』2007年2月(安土町、2009年刊行)
- カヴァリエーレ 2008: Cavaliere, Paola, “Azuchi no zu byobu:the Azuchi Castle folding screen”, 2008
- 太田 2017: Ota, Tomoko, *Ricerca a Roma*, 2017.6(未刊行)*
- 太田、ルー 2018: Ota, Tomoko, Roux, Éliane, *Rapporto della ricerca eseguita a Roma, Italia, tra il 20 febbraio e il 15 marzo 2018*, 2018.4(未刊行)*
- 太田2019a: 太田智子「フランス、カルパントラ市アンガンベルティーヌ図書館における調査報告(調査実施日 2018年12月12日)」2019年1月28日(未刊行)*
- 太田 2019b: Ota, Tomoko, *Rapporto della campagna di ricerca eseguita a Roma dal 20 al 31 Maggio 2019 e prospettive per le prossime indagini*, 2019.10(未刊行)*
- ルー 2019: Roux, Éliane, *ASCRN Report on Philips van Winghe and Network. Winter 2018 Research Period*, 2019.4(未刊行)*
- ルー 2020: Roux, Éliane, *ASRN Report on the Rome-Padua network of antiquaries and Far East(17th Cent.) Summer 2019 research period*, ed.by M.K.Erdmann, 2020.8(未刊行)*
- 新保淳乃「安土山図屏風のゆくえ」角川文化財団バチカンと日本100年プロジェクト報告書、刊行予定

★無断転載禁止★ *印は ASRN 内部資料・未刊行報告書のため、引用の際は©ASRN、執筆者名および報告書名を必ず明記ください。

連絡先: shimbokiyono@hotmail.co.jp

安土図屏風探索プロジェクト公式ホームページ

<https://www.azuchiscreens.org/>



Symposium in Azuchi
Azuchi Community Center
June 29 2019



Symposium in Nagasaki
Nagasaki International Art
Museum
January 27 2019



Dialogue on Azuchi Castle
Hirosi Sugimoto & Yoshikazu Senda
London Gallery Shirokane
April 5 2019



Past Crowdfunding Project
Mokuze
[Link \[Japanese\]](#)

文献資料にみる安土城天主



滋賀県文化スポーツ部文化財保護課
松下 浩

1. 『信長公記』～唯一無二の安土城関連文献

- ・織田信長の家臣太田牛一が記した信長の伝記
- ・永禄11年(1568)の上洛から天正10年(1582)の本能寺の変まで、1年のできごとを1巻ごとにまとめたもの15巻と、上洛以前のことを別にまとめた首巻
- ・できごとを淡々と記述。装飾性のない文章から、信憑性は高いと評価。

2. 『信長公記』に記された安土城

(1) 安土城の築城

「(天正4年) 正月中旬より江州安土山御普請、惟住五郎左衛門に仰付けらる。(中略)

四月朔日より、当山大石を以て御構の方に石垣を築かせられ、又其内に天主を仰付けらるべきの旨にて、尾・濃・勢・三・越州、若州・畿内の諸侍、京都・奈良・堺の大工・諸職人等召寄せられ、在安土仕候て、瓦焼唐人の一観相添へられ、唐様に仰付けらる。観音寺山・長命寺山・長光寺山・伊場山、所々の大石を引下し、千・弐千・三千宛にて安土山へ上せられ候。」(『信長公記』巻九)

天正4年正月中旬より普請開始。総奉行惟住五郎左衛門(=丹羽長秀)。

4月朔日より石垣普請。

動員した人夫～尾張・美濃・伊勢・三河・越前・若狭・畿内の諸侍=信長の勢力圏全体

(2) 動員した職人～京都・奈良・堺 文化的伝統がある地域 文化の粋

「御絵を狩野永徳」「上一重のかなくは後藤平四郎仕候。」「二重目より京のたい阿弥かなくなり。御大工岡部又右衛門、漆師首刑部、白金屋の御大工宮西遊左衛門、瓦、唐人の一観に仰付けられ、奈良衆焼き申すなり。

御普請奉行、木村二郎左衛門。」(『信長公記』巻九)

絵師：狩野永徳～室町幕府の御用絵師 桃山絵画の大家 狩野派の総帥

金具：後藤平四郎～後の大判座頭人後藤家

たい阿弥～京の鋳師 豊国神社の金銅釣灯籠を制作

大工：岡部又右衛門～熱田の宮大工 元亀4年(1573)琵琶湖で大船建設

(3) 安土城の基本情報「安土山御天主の次第」(『信長公記』巻九)

天主台石垣の高さ 12 間余≒22m

地階は土蔵 石垣に囲われた地下室

一階（二重）床面積 南北 20 間=36m 東西 17 間=30.6m

※天主台石蔵の広さは南北 20m×東西 20m

一階よりの高さ 16 間半≒30m

※姫路城：31.5m

様々な障壁画：「墨絵」・「御絵所金なり=金碧画」・装飾：「金燈炉」

上から二重目は八角形、外柱は朱塗。内柱は金箔。

最上階は四角形。座敷内外ともに金箔。

宝鐸～軒の隅から吊るす大形の風鈴 12個=4個+8個カ

（4）安土城天主完成

「(天正7年)五月十一日、吉日に付いて、信長御天主に御移徙。」(『信長公記』卷十二)

（5）盂蘭盆会のライトアップ

「安土御天主、并に惣見寺に挑灯余多つらせられ、御馬廻の人々、新道・中の江に舟をうかべ、手々に続松とぼし申され、山下かゝやき、水に移り、言語道断面白き有様、見物群集に候なり。」(『信長公記』卷十四)

（6）伝本丸の行幸御殿

「おもての御門より三の御門の内、御殿主の下、御白洲まで祇候仕り、(中略)各階道をあがり、御座敷の内へめされ、忝くも御幸の御間拝見なさせられ候なり。(中略)南殿へ罷上り、江雲寺御殿を見物仕候へと上意にて、拝見申候なり。(中略)是より御廊下続きに参り、御幸の御間拝見仕候へと御錠にて、かけまくも忝き、一天君・万乗の主の御座御殿へ召上せられ、拝濫に及ぶ事、有難く、誠に生前の思ひ出なり。御廊下より御幸の御間、元来檜皮葺、金物日に光り、殿中悉く惣金なり。(中略)

御幸の御間拝見の後、初めて参り候御白洲へ罷下り候処に、御台所の口へ祇候候へと上意にて、御厩の口に立たせられ、十疋宛の御礼銭、忝くも信長直に御手にとらせられ、御後へ投させられ、」(『信長公記』卷十五)

（7）惣見寺での徳川家康接待

「(天正10年)五月十九日、安土御山惣見寺において、幸若八郎九郎大夫に舞をまはせ、次の日は、四座の内は珍しからず、丹波猿楽、梅若大夫に能をさせ、家康公召列られ候衆、(中略)五月廿日、惟住五郎左衛門・堀久太郎・長谷川竹・菅屋玖右衛門四人に、徳川家康公御振舞の御仕立仰付けられ、御座敷は高雲寺御殿、家康公・穴山梅雪・石河伯耆・坂井左衛門尉、此外家老の衆御食下され、忝くも信長公御自身御膳を居ゑさせられ、御崇敬斜めならず。」(『信長公記』卷十五)

(8) 本能寺の変と安土の混乱

「(天正10年)六月二日巳刻、安土には風の吹く様に、明智日向守謀叛にて信長公・中将信忠卿御父子、御一門、其外歴々御腹めされ候由、御沙汰これあり。上下此由承り、言葉に出して大事と存知、初めの程は目と目を見合わせ、騒立つ事大方ならず。(中略)日比の蓄へ、重宝の道具にも相構はず、家々を打捨て、妻子ばかりを引列れ々々、美濃・尾張の人々は本国を心ざし、思ひ々々にのかれたり。其日、二日の夜に入り、山崎源太左衛門は自焼して、安土を居城へ罷退かれ、弥騒立つ事正体なし。蒲生右兵衛太輔、此上は御上臈衆・御子様達、先日野谷まで引退け候はんに談合を相究め、子息蒲生忠三郎を日野より腰越まで御迎へとして呼び越し、牛馬・人足等日野よりめしよせ、六月三日未刻、のかせられ候へと申され候、御上臈衆仰せられ様、とても安土打捨てのかせられ候間、御天主にこれある金銀・太刀・刀を取り、火を懸け、罷退き候へと仰せられ候処、蒲生右兵衛太輔希代無欲の存分あり。信長公、年来御心を尽せられ、金銀を鏤め、天下無双の御屋形作り、蒲生覚悟として焼払ひ、空シク赤土トナスベキ事冥加なき次第なり。其上、金銀・御名物乱取り致すべき事、都鄙の嘲弄如何々なり。安土御構、木村次郎左衛門に渡置き、夫々に御上臈衆へ警固を申付け、退申され候。端々の御衆はかちはだしにて、足は紅に染みて、哀れなる風情目も当てられず。」(『信長公記』巻十五)

3. 宣教師の記録

- ・来日していた宣教師の記録
- ・細かな観察と情報収集に基づいて、日本側の資料には見られない詳細な記述が見られる。
- ・宗教に関する部分については偏見に基づく記述も見られる。

(1) フロイス「日本史」

- ・イエズス会宣教師ルイス・フロイスが執筆したイエズス会の日本布教史

・安土城の様子

「彼は、都から十四里の近江の国の安土山という山に、その時代までに日本で建てられたものなかでもっとも壮麗だといわれる七層の城と宮殿を建築した。すべては裁断せぬ石から成り、非常に高く厚い壁の上に建ち、なかにはそのもっとも高い建物へ運び上げるのに四、五千人を必要とする石も数個あり、特別の一つ(の石)は六、七千人が引いた。」

「市から距たった湖の入江に沿った他の場所に、山麓を起点として(信長)は領主や高貴な人たちの邸宅を築くことを命じた。(中略)彼に従う諸国の領主たちは、山の周囲とその上部を囲み、非常に立派な邸を築いた。」

「(信長)は、中央の山の頂に宮殿と城を築いたが、その構造と堅固さ、財宝と華麗さにおいて、それらはヨーロッパのもっとも壮大な城に比肩し得るものである。(中略)(城の)真ん中には彼らが天守と呼ぶ一種の塔があり、我ら(ヨーロッパ)

パ)の塔よりもはるかに気品があり壮大な別種の建築である。この塔は七層から成り、内部、外部ともに驚くほど見事な建築技術によって造営された。(中略)この天守は、他の全ての邸宅と同様に、我等がヨーロッパで知るかぎりのもっとも堅牢で華美な瓦で掩われている。それらは青色のように見え、前列(の瓦)にはことごとく金色の丸い取付け(頭)がある。(中略)」

「信長は、この城の一つの側に廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿を造営したが、それは彼の(邸)よりもはるかに入念、かつ華美に造られていた。」

・本能寺の変

「彼(明智光秀)はただちに信長の居城と館を占拠し、最高所(天守閣)に登り、信長が財宝を入れていた蔵と広間を開放すると、大いに気前よく仕事に着手し、まず彼の兵士たちに、ほとんど労することなく入手した金銀を分配した。」

「明智の軍勢が津の国において惨敗を喫したことが安土に報ぜられると、彼が同所に置いていた武将は、たちまち落胆し、安土に放火することもなく、急遽坂本城に退却した。しかしデウスは、信長があれほどじまんにしていた建物の思い出を残さぬため、敵が許したその豪華な建物がそのまま建っていることを許し給わず、そのより明らかなお知恵により、付近にいた信長の子、御本所(信雄)はふつうより知恵が劣っていたので、なんらの理由もなく、(彼に)邸と城を焼き払うよう命ずることを嘉し給うた。(城の)上部がすべて炎に包まれると、彼は市にも放火したので、その大部分は焼失してしまった。」～織田信雄放火説の根拠

(2) イエズス会日本年報

- ・天正7年以降、日本在留のイエズス会士が、毎年、各地方区の通信をまとめて総長に送った報告書。
- ・それまで宣教師が随時に送っていたものを、巡察使ヴァリニャーノが制度化

・安土城の様子

「彼に服従せる諸国の領主は甚だ立派なる邸宅を建築し、高き石垣をもってこれを囲み、石垣の上には胸壁を設け、皆よき城の如きものである。かくの如き邸宅は最も高き山の四周に立ち並んで上まで達し、山頂には信長の城がある。この城の工事はヨーロッパの最も壮大なるものと比することができる。周囲の堅固なる石垣は高さ五十パレルモを超え、その中に甚だ廣大壮麗にして黄金の飾り施したる家屋が立ち並び、その構造は人口の極を尽くしたものと思はれる。中央に一種の塔がある(その形は我国の塔よりも壮大である)。塔は七層楼で内外ともに驚くべき構造である。内部の彫刻は悉く金で、甚だ巧に色彩を施してあり、外部は各層違った色で塗り、或は白色で、日本風に黒漆を塗った窓を備へ、或は朱または青のがあり、最上層は金色である。この塔もその他の家屋も皆世界中で最も堅牢なる青い瓦で覆ひ、その前面には金を被せた円形の頭がある。屋根の上には立派な鬼瓦 carrancas が数箇あって、建築を甚だ壮麗なものとしてゐる。建物は悉く木造であるにもかかわらず、内外ともに石及び石灰を用ひて造ったものの如く見

える。要するにこの建築はヨーロッパの最も壮麗なる建築と比することができる。」

・本能寺の変後の安土城

「信長 Nobunanga の死後都地方に留った最も強い領主で、勝利を収め、諸国の大部分を領するものは、羽柴筑前殿 Faxiba Chicugendono である。彼は信長の名によって、播磨国にゐて毛利 Mori の諸国を征服したが、事を有利に運ぶため、信長と共に殺された世子〔信忠〕の子にして、信長の孫に当る十三歳の少年〔秀信〕を擁立し、日本の王 monarcha の称号をもって安土山に置き、信長の第二子オチャセン・ホンジョドノ Ochaxen Fonjodono〔信雄小字茶筌丸 本御所と称す〕と称する伊勢 Ixe の王を傳としてが、これは表面的で、羽柴が一切を治め、己の欲するところをなし、伊勢の王も父に対するが如く彼に服従している。（中略）

今は天下に羽柴が尊敬すべき人がなくなったため、彼は一層自由に振舞ひ始めたが、そのなしたところをつぎに述べるであらう。第一に、天下の継嗣である信長の孫〔三法師秀信〕は初め安土山に置いて大いに尊敬したが、基明智の城であった坂本の城に移し、一貴族をその傳とし、少しも優遇しなかった。」～三法師が家督継承 織田信雄が後見

4. 古文書・古記録に記された安土城

(1) 安土築城

・『言継卿記』

「（天正4年9月）廿四日（中略）一、武家御城之内桃木植生甘本計令堀之、此方之土居ニ栽之、昨日南之御門、今日東之御門崩之、江州安土へ引之、石共弥方々取之云々、」

武家（足利義昭）の城（二条城）の桃の木を山科言継邸の土居に植え、南門と東門を安土へ移築する。石は各所に持ち運ばれる。

・阿閉貞征・同貞大連署書状（菅浦文書）

「 舟のくさりなわ・くさりたゝミ・こも以下候者持可来候、へいのすきの用候、以上

於安土普請可申付用、ぼう・もつこ令用意、中三日雑意仕、屋並ニ可罷越候、不寄出家一人も不越者於在是者、堅令違乱候、恐々謹言、」

安土城普請のため、道具持参で人夫を派遣するよう阿閉から菅浦に命ずる。

・織田信長朱印状（岐阜市歴史博物館所蔵文書）

「多聞有之高矢倉、此方へ取越候、」

多聞城の高矢倉を安土へ運ぶよう、信長より筒井順慶に命令する。

・羽柴秀吉自筆判物（小山家所蔵文書）

「 てんしゆてつたいの衆

七十五人 い七
十人 ひらうきやう
廿人 くわしゆり
廿人 やひやう

(中略)

右の衆して三はんニわり候て、まいにちのてつたいあるへくそうろう、しせん御かゝし候ハハ、御とゝきあるましく候、」
羽柴秀吉が、天主作事の人夫を家臣たちに割当。

・織田信長黒印状（細川家文書）

「去年矢蔵申付候時、召仕候大工内、上手兩人候つる、其者を早々可越置候、其外ニもよく仕候大工を馳走候て、十人急度可下置候、不可有由断候也、」

信長が細川藤孝に大工を寄越すよう命令。

※築城に際し、家臣たちに人夫等を動員させる。天下普請の初期形態。

(2) 本能寺の変から安土廃城へ

・兼見卿記

「三日、己、雨降、日向守至江州相働云々、
四日、庚寅、江州悉属日向守、令一反云々、
五日、辛卯、日向守入城安土云々、日野蒲生在城、不及異儀相渡云々、
六日、壬辰、(中略)日向守へ為御使被下之旨仰也、畏之由申入、明日可致発足之旨申入、(中略)
七日、癸巳、至江州安土発足、(中略)申下刻下着安土、召具佐竹羽州案内者一人、以此使者申案内登城、門外ニ暫相待、次入城中、日向守面会、(中略)」

6月5日、明智光秀が安土城に入城。

6月6日、安土への勅旨として吉田兼見が派遣される。

6月7日、吉田兼見、安土城内で明智光秀と面会。

※本能寺の変以後も安土城が機能

・兼見卿記別本

「八日、甲午、早天発足安土、今日日向守上洛、諸勢悉罷上、(中略)
十五日、壬申、安土放火云々、自山下類火云々、三七郎殿為御礼差下侍従了、(中略)

向州於醍醐之辺討取一揆、其頸於村井清三、三七郎殿へ令持参云々、(中略)

十六日、癸酉、三七郎殿其外諸勢至安土下向云々、数万騎不知数之由申訖、向州頸・筒体、於本応寺曝之云々、」

6月8日、明智光秀上洛。

6月15日、安土城炎上。山下より類焼。明智光秀の首を織田信孝に届ける。

6月16日、織田信孝等安土へ下向。明智光秀の首と胴体を本能寺で曝す。

・羽柴秀吉書状（専光寺文書）

「（前略）

一、若子様之儀、未無御越候由候、普請等無出来ニ付而、右之分ち相聞候ニ、其方程近候間、貴所被煎御肝候ハて不叶事候、其元御普請をハ、先々被置候ても、安土御普請急度被仰付、不被参越候事御油断と存候、左様ニ候へ者、其方我等外聞あしく候間、山崎普請をも打置候て、其方同前ニ安土へ罷越可申付候哉、

羽柴秀吉が若子様（三法師）の安土入城を急ぐため、丹羽長秀に安土城の普請を急がせる。

・羽柴秀吉・丹羽長秀・池田恒興連署書状（滋賀県立安土城考古博物館所蔵文書）

「御状拝見候、仍而此表之儀、三介様御名代ニ相究、若子様今日請取申訖、供奉候、当国不届仁者曲事ニ相臥、悉一篇ニ申付候条、可有其御心得候、将亦委儀森勝可申候、恐々謹言、」

三介（織田信雄）を後見に、若子様（三法師）安土入城。

・多聞院日記

「（天正11年閏正月）十二日、昨夜雪降了、順慶法印従去四日御本所アツチへ被出付、為礼筑州同道昨日帰了、」

御本所（織田信雄）の安土入城に対し、筑州（羽柴秀吉）と筒井順慶が礼に向かう。

※本能寺の変以後も明智光秀、織田信孝、羽柴秀吉、織田信雄らが安土入城
安土城は天下人の城として機能 入城することで信長の後継者であることをアピール

5. 天守指図（静嘉堂文庫所蔵）について

- ・加賀藩作事奉行・御大工池上家の資料に含まれる。
- ・署名は「池上右平正治（～1712?）」。しかし後世の写本。筆者は池上延世（のぶつぐ ～1789）。～内藤昌氏の考証に拠る。
- ・天守各階の平面図
- ・内藤昌氏が発見 安土城天主の指図と評価（写本の写本）～吹き抜けの根拠
- ・安土城に関する新資料として注目。研究史上の画期。
- ・評価は大きく分かれる。右平の創作と評価する研究者も。
- ・資料批判が不十分 さらなる調査研究が必要

6. 文献資料に記された安土城

- ・建物の様子を具体的に記述、しかし部分的。復元は困難。

【資料】『信長公記』巻9

安土山御天主の次第

石くらの高さ十二間余なり。

一、石くらの内を一重土蔵に御用ひ、是より七重なり。

二重石くらの上、広さ北南へ廿間、西東へ十七間、高さ十六間ま中有り。柱数式百四本立。本柱長さ八間、ふとさ一尺五寸、六寸四方、一尺三寸四方木。

御座敷の内、悉く布を着せ黒漆なり。

西十二畳敷、墨絵に梅の御絵を狩野永徳に仰付けられ、かゝせられ、何れも下より上迄、御座敷の内御絵所悉く金なり。同間の内御書院あり。是には遠寺晩鐘の景気かゝせられ、其前にぼんさんををかせられ、次四てう敷、御棚に鳩の御絵をかゝせられ、又十二畳敷、鵝をかゝせられ、則鵝の間と申すなり。又其次八畳敷、奥四てう敷に雉の子を愛すると所あり。

南又十二畳布、唐の儒者達をかゝせられ、又八てう敷あり。

東十二畳敷、

次三てう布、

其次、八てう敷、御膳拵へ申す所なり。

又其次八畳敷、是又御膳拵へ申す所なり。

六てう敷、御南戸、又六畳敷、

何れも御絵所金なり。

北ノ方御土蔵あり。其次御座敷、

廿六てう敷、御南戸なり。西六てう敷、

次十てう敷、又其次十てう敷、

同十二畳敷、御南戸の数七つあり、

此下に金燈炉をかせられたり。

三重目、十二畳敷、花鳥の御絵あり。則、花鳥の間と申すなり。別に一段四てう敷御座の間あり。同花鳥の御絵あり。

次南八畳布、賢人の間にひょうたんより駒の出でたる所あり。

東麝香の間、八畳敷・十二てう敷、御門の上、

次八てう敷、呂洞賓と申す仙人并にふゑつの図あり。

北廿畳敷、駒の牧の御絵あり。

次十二てう敷、西王母の御絵あり。

西御絵はなし。御縁二段広縁なり。

北四てう敷の御物置の御南戸あり。

口に八てう敷の御座敷これあり。

柱数百四十六本立なり。

四重目、西十二間に岩に色々木を遊ばされ、則、岩の間と申すなり。

次西八畳敷に竜虎の戦あり。

南十二間、竹色々かゝせられ、竹の間と申す。

次十二間に松ばかりを色々遊ばされ、則、松の間と申す。

東八てう敷、桐に鳳凰かゝせらるゝ。

次八でう敷、きょゆう耳をあらへば、そうは牛を牽いて帰る所、同人の出でたる故郷の躰。

次御小坐布、七畳敷、でいばかりにて御絵はなし。

北十二でう敷、是に御絵はなし。

次十二でう敷、此内西二間の所にてまりの木遊ばさる。

次八畳敷、庭子の景気、則、御鷹の間と申すなり。

柱数九十三本立。

五重め、御絵はなし。南北の破風口に、四畳半の御坐敷両方にあり。

こ屋の段と申すなり。

六重め、八角四間あり。外柱は朱なり。内柱は皆金なり。釈門十大御弟子等、尺尊成道御説法の次第、御縁輪には餓鬼共・鬼共かゝせられ、御縁輪のはた板にはしやちほこ・ひれうをかゝせられ、高欄ぎぼうしほり物あり。

上七重め、三間四方、御坐敷の内皆金なり。そとがは是又金なり。四方の内柱には上竜、下竜、天井には天人御影向の所、御坐敷の内には三皇・五帝・孔門十哲・商山四皓・七賢等をかゝせられ、ひうち・ほうちやく数十二つらせられ、狭間戸鉄なり。数六十余あり。皆黒漆なり。御座敷内外柱惣に漆にて布を着せさせられ其上皆黒漆なり。

上一重のかなくは後藤平四郎仕候。

京・田舎衆手を尽し申すなり。

二重めより京のたい阿弥かなくなり。

御大工岡部又右衛門、漆師首刑部、

白金屋の御大工宮西遊左衛門、

瓦、唐人の一観に仰付けられ、奈良衆焼き申すなり。

御普請奉行、木村二郎左衛門。

以上、

【文化庁提出実績報告書から】

(担当：学務部社寺兵事課 日名子元雄ひなごもとあ技師)

社寺兵事課・・・御陵墓、神社及び祭祀並ニ神職、寺院、堂宇教会所宗教、国宝、史蹟名勝天然記念物、戒厳、兵役徴募等、召集徴発等、その他教育上事

日名子元雄・・・1911（明治44年）～1994（平成6年）、専門は建造物。文化財建造物保存技術協会常務理事、JAPAN IKOMOSU 監事。昭和十七年以降「不要仏具献納運動」戦時中、金属類回収令が出された梵鐘のうち、保存を求める「回収除外申請書」が三十五件あったことを県教委文化財保護課の文書類から発見。うち申請が認可されたものが三十一件あり、いずれも日名子技官が文化財知識や行政事務の手法を駆使して認可の文書を起案していたことがわかった。長浜市では竹生島宝厳寺や、神照寺（新庄寺町）、念慶寺（湖北町速見）、米原市の萬松院が除外申請を出し、認可されていた。日名子は除外認可を連発した直後に非常召集されて戦地に動員され一等兵のまま復員している。その後、滋賀・奈良の文化財行政を担い、文化庁文化財部建造物課長を最後に退官した。

(経費：910圓)

内訳・・・・・・・・水準遺形損料 15圓
 石倉内部土砂取除キ運搬 礎石面下迄掘下ゲ 20立坪^{りゅうつぼ}
 単価4圓 80圓 (20×6.0105184 m³)
 石倉内部石垣積ミ直シ積ミ足シ等 29.5面坪^{めんつぼ} (29.5×1.82×1.82)
 単価13圓50銭 398圓25銭
 石倉内部及天主閣趾不用樹木伐り取り 10圓
 石倉入口階段修理 80圓
 外部石積 30面坪 単価6圓 180圓
 足代材料運搬器具損料 61圓75銭
 雑費 85圓

(参考 昭和17年諸物価)

大卒銀行員初任給 70～75圓 小学校教員初任給 50～60圓
 たばこ（ゴールデンバット）10銭
 ビール 57銭・白米 10キロ 3円32銭

(修理前の破損状況)

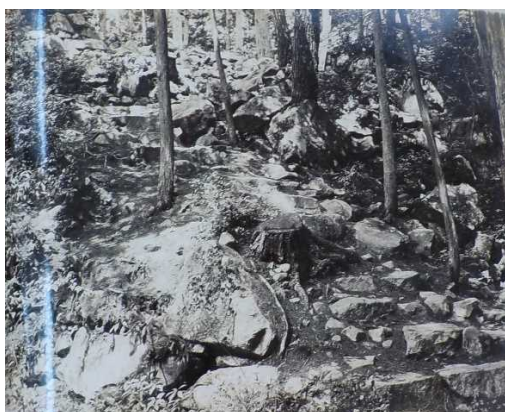
天主閣外廓石垣・・・下方3分の2を残して上方すべて崩壊

石倉内部石垣・・・石垣石上端残存無し、全面尺餘の厚さに礎石埋没

天主閣登り口・・・周囲石垣上半すべて崩落、數尺の厚さで埋没



石倉内部（石垣基底部確認のため筋掘りした後の状況）



登り口（修理前）



登り口（修理後）

(石倉内部整理工事)

崩落石で石倉周囲の石垣上に約1段程度積上げ、他は石垣上の北方空地に運搬。

石倉周囲の石垣で、構造上危険な數箇所^に亘り最小限度で積直し。

天主閣外廓石垣上端欠如箇所は、仮設石垣を高さ4尺内外、長さ13間餘設置。

礎石間は叩き漆喰面まで土砂を鋤取り。中央部礎石欠如地点は壺堀されたものと推定。この穴から出土した壺破片、炭化木片は如何なる意味の遺蹟なりや推定不能。

(登り口工事)

崩落石で周囲石垣を數尺程度積み足したほか仮設石段にあてる。

段石の一端のみを存するものについては延長復原する。

全く発見できなかった箇所は今後の保存と見学者の便を図るため仮設葛石^{くずいし}設置。

排水については新たな排水暗渠^{あんきよ}施設は作らず。

登り口斜面の土砂の流失を防ぐため仮設踏石を設置。

【滋賀縣史蹟調査報告第十一冊安土城址から】

(石蔵内部の遺蹟)

不規則な六邊形^{へん}平面、南邊約 8 間半、北邊約 10 間

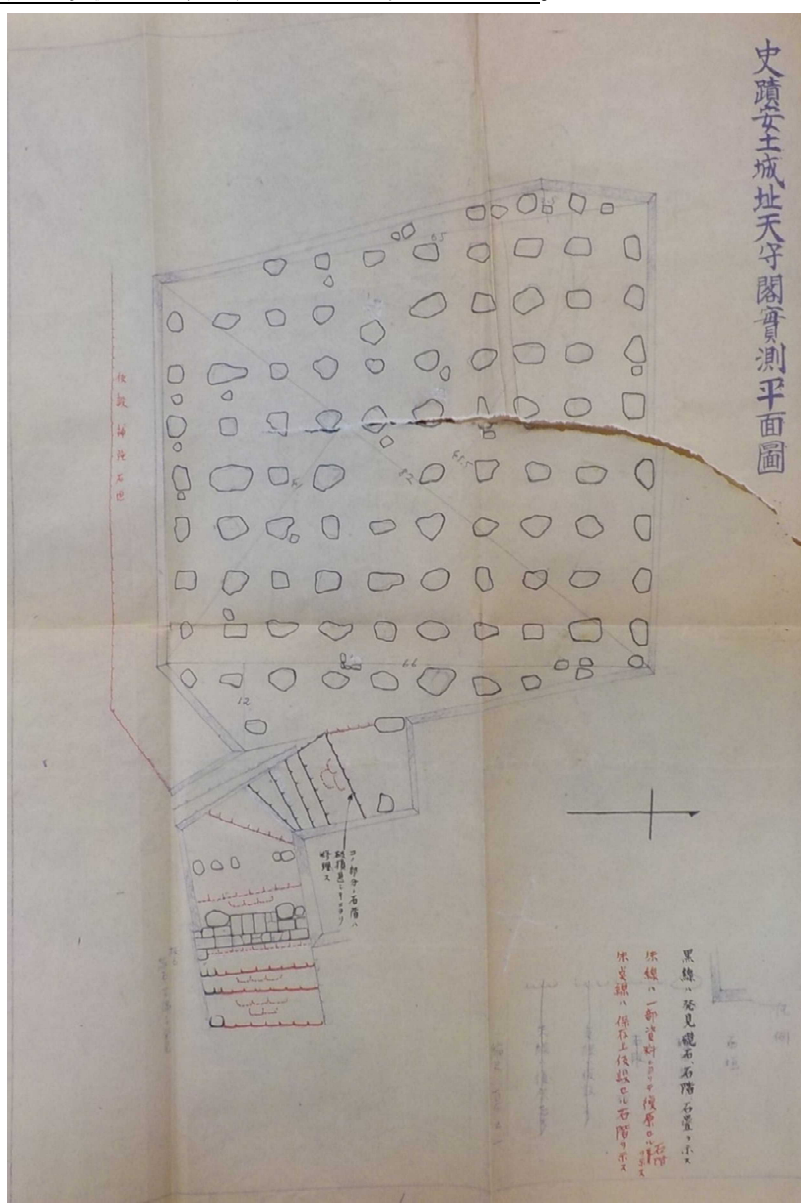
東西 10 列、南北 10 列、柱^{ほんぼしら}真々 6 尺 9 寸間隔に礎石配列

礎石の数は本柱礎石と推定されるもの 91 箇、束石又は控柱礎石^{つかいし ひかえぼしら} 10 数箇

中央柱間礎石は欠如、漆喰^{しつくい}ではなく軟土の埋土。約 2 尺平方、深さ 4 尺許の穴

焼土・木片・褐色壺破片 10 数箇発見。天主と同時期か焼亡後のものかは不明。

穴の底の状況から掘立柱の穴とは考えられない。



(登口の遺蹟)

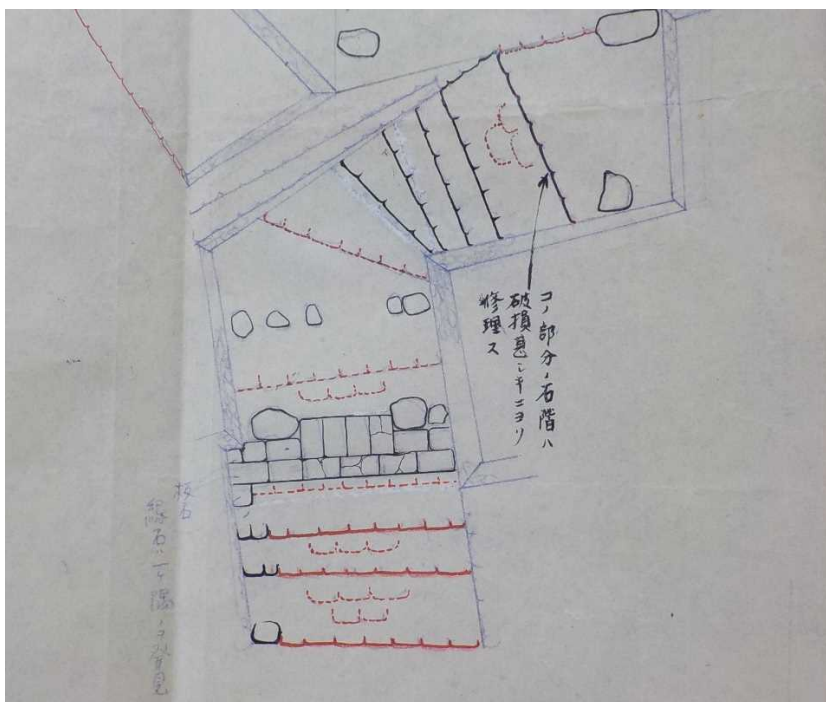
2回屈折、中央やや下方に石畳のある門址。

門址下方石段は端石が残るのみで他はすべて欠失。

門址は門柱礎の礎石2個検出。柱真々約9尺。礎石前面に幅1尺5寸、長約3尺、厚約2寸内外の扁平なる切石を敷き込む。

礎石背後は平坦な余地少なく、扉装置は引違戸、前開き扉、^{あげと}揚戸か。

門址上方は廻り階段形式



(参考) 「仁正寺大守代々登山記録」(宝永2年2月～)

享保六年三月六日(1721年)

六日 壱岐守殿(仁正寺藩第4代藩主市橋直方)朝先桑実寺江参詣、七ツ時裏坂ヨリ登山、直二泰殿公江廟参、天主見物相済ソロテ本堂江被入ソロ事、江藤入口ヨリ道案内、柴田六左衛門相勤候事(後略)

元文二年八月五日(1737年)(仁正寺藩第5代藩主市橋直举(なおたか))

五日 領地江明日之役人申付歩五人来、天主卵塔、表坂百々橋迄、裏坂江藤道筋掃除申付ル也(後略)



石倉内部（整理後左側南辺部分）



石倉内部（整理後右側東辺部分）



石倉内部登り口方面



礎石間の叩き漆喰



登り口上半部



登り口下半部

【その他両報告書からの所見】

- ・礎石上面の火災痕については記述無し（本丸礎石については記述している）
- ・中央の穴について、掘立柱を否定（建造物の技官の見解として信憑性大、仁正寺藩記述の「天主卵塔」が気になる）。壺堀されたと推定。
- ・出土遺物が極めて少ない

平成の安土城天主跡発掘調査

～平成の調査から見えてきたこと～

2023.3.26 「幻の安土城」復元プロジェクト・歴史セミナー

安土城復元研究の過去・現在・未来

滋賀県文化スポーツ部文化財保護課 岩橋隆浩

1. はじめに一本日の構成とねらい

◎天主跡の発掘調査の歴史を知る

⇒課題の抽出

◎平成の発掘調査成果から天主を見る

◎残された課題は何かを知る

2. 安土城天主跡の概要と発掘調査の歴史

◎その位置

安土城の位置と立地の特徴

城内での位置

主郭部⇒安土城の中核部

◎その歴史

築城から完成そして・・・

天正4年(1576) 築城開始

天正6年(1579) 天主完成

天正10年(1582) 本能寺の変

本能寺の変後の安土城炎上

安土城はすべて灰燼に帰したのか？

⇒そうではない 主郭部のみが炎上した

それから358年後

昭和15年～16年に天主跡と本丸跡で発掘調査が実施される。

⇒その内容については第2部-3 仲川靖さんの資料を参照のこと

3. 昭和15年度の調査

①発掘調査箇所

天主台の穴蔵

天主台への登り口

②調査の目的

自然崩壊する天主と本丸の保存工事の事前調査

「天主石蔵内部の礎石及び登口の形式を明らかにする目的を以つて・・・」

③調査前の状況

天主台の石垣の外側は、その上方約三分一許りがすべて崩壊

→天主台は宛らこれら土砂の巨大な盛土の如き状態

天主内部石蔵(地階)周囲の石垣も同じく・・・石蔵内に崩壊堆積し・・・

→舊礎石は全面尺餘の厚さに埋もれてゐた

石蔵内部については、礎石の存することは以前より知られてあり・・・

天主登口・・・如何なる登口形式が存するか事前には全く窺ひ知るを許さず・・・

④穴蔵内の調査結果 『滋賀縣史蹟調査報告書 第十一冊 安土城址』より

・穴蔵の形状

不規則なる六邊形の平面

南邊及び北邊は最も長く、南邊約八間半、北邊約十間あり、且ほゞ平行してゐる。

・礎石群

東西十列、南北十列

縦横共推定柱真々六尺九寸

東西の柱通りは北邊及び南邊の石垣線とほゞ平行してゐる。

中央部の柱真に相當する地點に礎石を欠く外はすべて完存してゐる

移動せるもの一箇、其他多少沈下傾斜せるものあるも全體として大むね舊状のまゝ

・礎石

本柱礎石と推定されるもの九十一箇

其他束石又は控柱礎らしきもの十數箇

礎石の大きさは、本柱礎に於いて小なるもの約四平方尺、大なるもの約十八平方尺控柱礎一平方尺内外

・床面

堆積土砂及び石垣石類を取除く中、礎石間全面に當初の叩き漆喰層の存在するを發見・・・
叢生した樹木・・・樹根はこの漆喰層にて阻まれ、この層以下は滲入せず・・・

→著しく舊態を更め、嘗ての壯大な天主の規模を偲ぶ舊礎の全貌が極めて明確となつた
礎石間の漆喰・・・殆ど全面にその痕跡が残り・・・

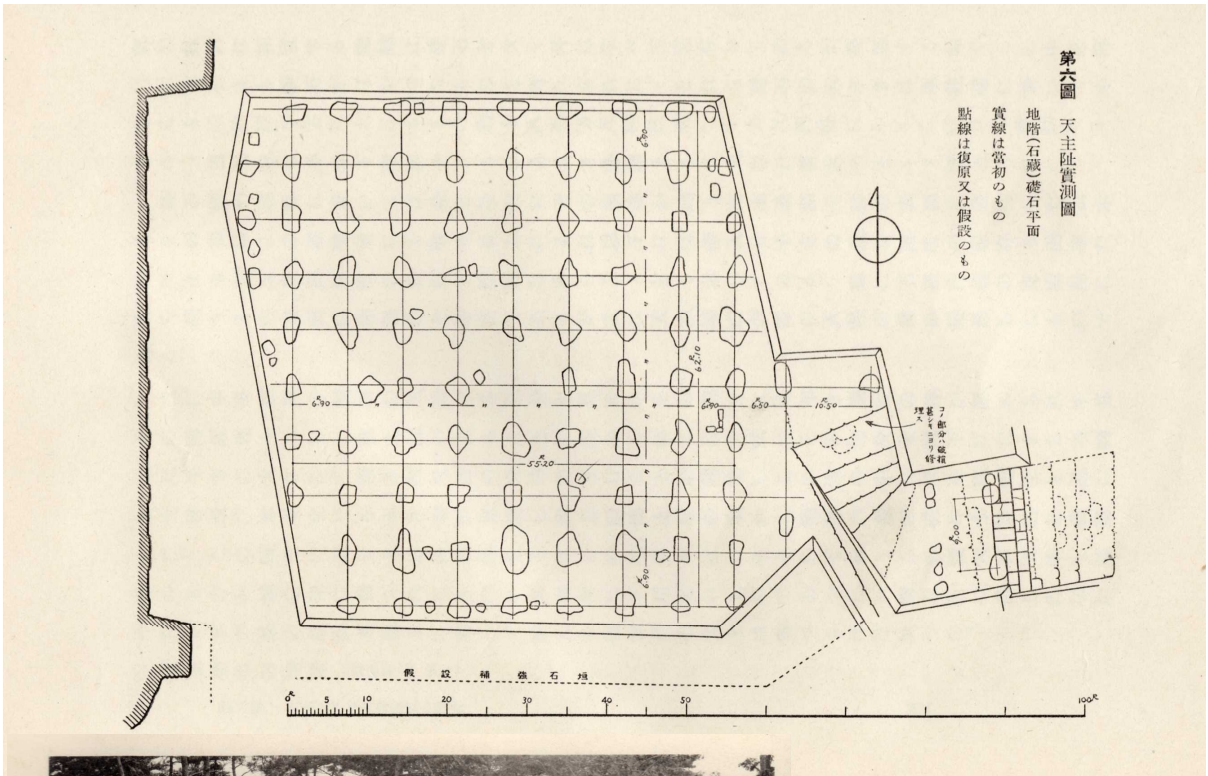
殊に石蔵内部の東南部によく残り、その表面は赤褐(旧字体)色を帯びてゐる

→天主焼亡の際の火熱の爲め變色したものである

- ・中央柱眞の礎石の欠如せる部分
 - 叩き漆喰の跡が認められず
 - 埋土らしい軟土層のあることが認められた
 - 試にその部分を掘り下げた
 - 約二尺平方の大きにて深さ約四尺許の穴のありしことが判明
 - 穴の中には全部焼土と思しき土砂及び木炭化せる木片等が充満
 - 焼土層の中から褐(旧字体)色の壺の破片十數箇を發見
 - 焼土の部分と地山の部分とはその境界がはつきりしてをり・・・
 - 天主と同時のものか、焼亡後に掘られたものか・・・如何なる用途のものであつたか・・・明らかになし得なかつた
 - 穴の底の状況其他より考へて少くも掘立柱の穴とは考へられなかつた
- ・天主登口
 - 在來全く不明であつた
 - 堆積土砂六七尺の下方に當初の登段遺址の存するを見出した・・・
 - 登段は東から西に向つて上り・・・
 - 一直線でなく中途に於て二回屈折
 - 中央よりやや下方に石疊のある門址が發見された
 - 門址には門柱礎と認められた礎石二個が兩側に並び・・・推定柱眞々約九尺
 - この礎石間及びその前面に巾一尺五寸、長約三尺、厚約二寸内外の扁平なる切石を敷・・・
 - 扉装置・・・後考を要する
 - 門址より下方石段は・・・端石が一二残るのみにて、他はすべて散逸して不明
 - 門址の上方には廻階段形式が大部分完存
 - 尙用途不明の葛石らしきもの數箇あり・・・
- ・仮設工事
 - 實測圖に於いても・・・明確にした(PL 1 参照)
 - 登口に於ける補足石段及び假設踏石は・・・當初・・・皆切石なるのに對し、自然石を以て設置
 - 天主南邊の石垣・・・甚しく南へ崩壞
 - その附近の石藏内部側の石垣をも危険状態に陥らしむる恐れがあつた
 - 假設石垣を高さ三四尺、長さ十二間に亘り設けた

⑤昭和の調査の課題

- ・高さの情報がほとんどなく、掘った遺構の断面情報が全くない。
 - ・図面や写真が少なく、得られる情報が少ない。
- ※穴蔵床面の状況および掘削した遺構の内容が、文章表記だけでは不明確という点に集約。



圖版第九



(て見を東りよ西・部内藏石) 陸主天(一)



(す示を噴漆き印勿間石礎に並石礎・部内藏石) 上 同(二)

PL 1 昭和15年度の安土城跡天主台平面図(縮尺不同)と発掘調査完了状況写真
写真上: 埋戻後の状況か?
写真下: 検出面の状況か?
『滋賀縣史蹟調査報告書 第十一冊 安土城跡』より

4. 平成の調査

①天主台とその周辺の主な発掘調査箇所

天主台穴蔵（H12）

天主台北西隅角部～天主台北面（H12）

天主台西裾部(二の丸東溜り)（H10）

②天主台穴蔵

◎調査の目的

- ・床面の残存状況と掘り込まれた遺構の有無の確認
- ・中央ピットの内容確認 など

◎調査の結果

・床面

昭和15年の調査時に検出した面を再検出。

現地表面から1～20cm下に硬化面(タタキの床面?)があることを再確認。

→硬化面(タタキの床面?)は穴蔵内全面で検出したわけではない。

→造成土と考えられる黄褐色系土の部分や岩盤が露出している部分もある。

→今回の検出面は本当に昭和15年に検出した面なのか??



かつての調査写真と現況の突き合わせ、礎石の側面の観察などをおこなった。

礎石天端と検出面の比高差・・・大きくなっているように見える。

礎石側面・・・被熱部と非被熱部の境界が見られるものが多くある。

検出した硬化面の高さ(標高)・・・均一ではない。

→硬化面(遺構検出面)の標高は196.8m～197.0mで全体的には南側の標高が低く、

さらにその中でも東側の標高が低い傾向。

今回の検出面

昭和15年当時の検出面よりも低い位置であることがうかがえる。

ただし穴蔵の縁辺部は中央部や南東部に比べると良い状態で残存。

この面の上面で多数の遺構を検出した。

床面以外の遺構については後述

検出した現状の床面の表面の状況

・南東部の状況

赤褐色の「当初の叩き漆喰層」⇒南東部と南部・北部・西部のごく一部

標高は169.8m～197.0mで、表面の凹凸が非常に激しい。

・北西部～西部の状況

黄褐色の非常に硬質の面と、それが被熱赤化した面。

見た感じで叩き土間と言ってもよいような非常に硬い土層。

標高196.95m～197.0mと非常に均一かつ平滑な面。



PL2 平成12年度の安土城跡天主台穴蔵平面図(縮尺不同)

『特別史跡安土城跡発掘調査報告12』より転載

・それ以外の部分

大部分が黄白色もしくは褐色系の比較的硬質な面。

周縁部の面とは硬さが違う印象。⇒踏みしめられた感じ??

標高は196.8m~196.9mで、縁辺部の残存状況の良い部分に比べると低い。

床面の化学分析

床面の造成方法を探るために実施。

当初の床面と考えられる試料と造成土と考えられる試料を比較した。

両者とも漆喰叩きの際に混入される石灰等の成分が特徴的に検出されなかった。



(寸示を喰漆き印の間石礎に並石礎・部内蔵石) 上 同(二)

PL3 安土城跡天主台穴蔵の床面検出状況 上：平成の調査 下：昭和の調査(報告書より転載)



PL 4 安土城跡天主台穴蔵
床面検出状況『特別史跡安土城跡
発掘調査報告12』より転載
上：穴蔵南半（東から）
中：穴蔵東半（南から）
下：穴蔵西半（南から）

・礎石

本柱礎石

天主の構造を支えるための礎石

昭和 15 年に検出されたものを全て (90 基) 確認した。

穴蔵床面に基本的に碁盤目状に配置されている。

礎石列の軸線は南北列が真北～真南、東西列が真東～真西を指向。

柱間は基本的に 7 尺と考えた方が妥当か。⇒昭和の調査時は 6 尺 9 寸と想定。

穴蔵縁辺部はその形状に規制されて、柱間のやや短い部分がある。

東西方向の柱列の一部のみ。南北方向の柱列には規制される部分はない。

小型礎石

本柱礎石よりもかなり小さい一辺約 20～50 cm の礎石 (小型礎石) を 22 基検出。

今回、新たに 9 基を検出した。

昭和 17 年刊行の報告書の平面図には 19 個記載。うち 2 個は浮き石であることを確認した。また現存しないものが 4 基ある。

その配列に規則性はなさそう。

本柱礎石の柱間の半間の位置にあるが軸線に乗らないもの。

本柱礎石のすぐ脇にあるもの。

小型礎石は、本柱礎石と考えられる大型の礎石が顕著な被熱痕を残すのに対して被熱痕が顕著なものが非常に少ない点から、天主が機能していた時期には多くが床面形成土に覆われていた可能性が高い。では用途は？・・・よくわからない。

本柱礎石の柱痕跡

被熱痕から推測できる柱の痕跡

⇒本丸建物の礎石では比較的良好に確認できるものがある。

柱が立っていた部分が方形に残り、その周囲は火災で被熱焼損する場合。

上記と逆の場合：柱が立っていた部分が赤黒く変色している場合。

では天主ではどうなのか？

風化が激しく表面観察は難しい状態であるが、いくつかの礎石で確認した。

一辺 30～40 cm ほどの方形の痕跡を想定している。

・床面に掘られた遺構

小形の円形もしくは楕円形の小形遺構。

→大部分は浅い皿状の遺構になる。

→形状や検出された位置から小形の礎石が抜けた跡と推測。

これらの遺構以外にも床面上では多数の遺構を検出。

→多くは現代の遺物が含まれている不定形な土坑。

北西隅では方形の土坑・南東部石垣裾部では溝状遺構。

→これらは安土城時代の遺構の可能性が高い。

・中央ピット

昭和 15 年度に調査されたが平面や内部の形状などの詳細が不明。

→調査後に埋め戻された土を除去して内部を再調査した。

深さ約 1.1m で底面に達する。

地山の岩盤層に掘り込まれている。

底面は南西から北東方向に緩やかに傾斜

壁面の北から東は袋状だが、それ以外ではほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。

→断面形状は長靴形になる。

出土遺物から、今回掘削した埋土は昭和 15 年の調査後に埋められたものと判断。

昭和 15 年に出土した備前焼甕と同じものと思われる破片が多数出土。

また、金属製ボタンやガラス瓶の破片が出土。

この遺構の機能については、昭和の報告書の見解は超えられないが、掘立柱の可能性も捨てきれない。

→しかし天主台が当初予想していた栗石基礎ではなく地山整形であることを確認することができた。

→穴蔵を持つ天主台の初期工法の解明の大きな一歩。

・天主台の地下構造

地下レーダー探査と電気探査を実施。

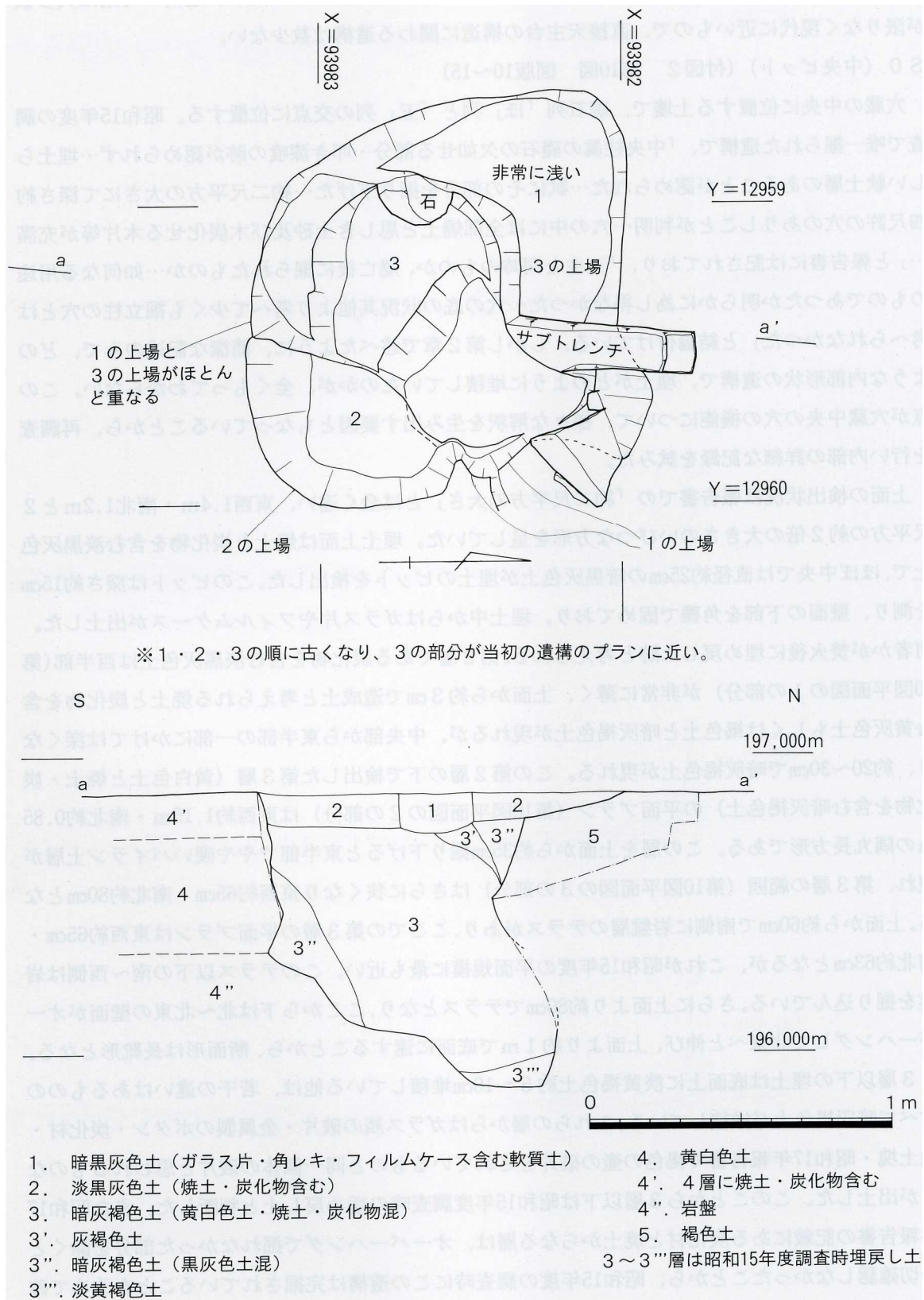
自然の岩盤層をうまく利用して、天主の重量に耐えうるような造成を行っている。

天主台を含む主郭部では、比較的浅い位置に岩盤層が分布していることが判明。

⇒穴蔵床面の一部や穴蔵床面に掘られた遺構の壁面で岩盤層を確認している。

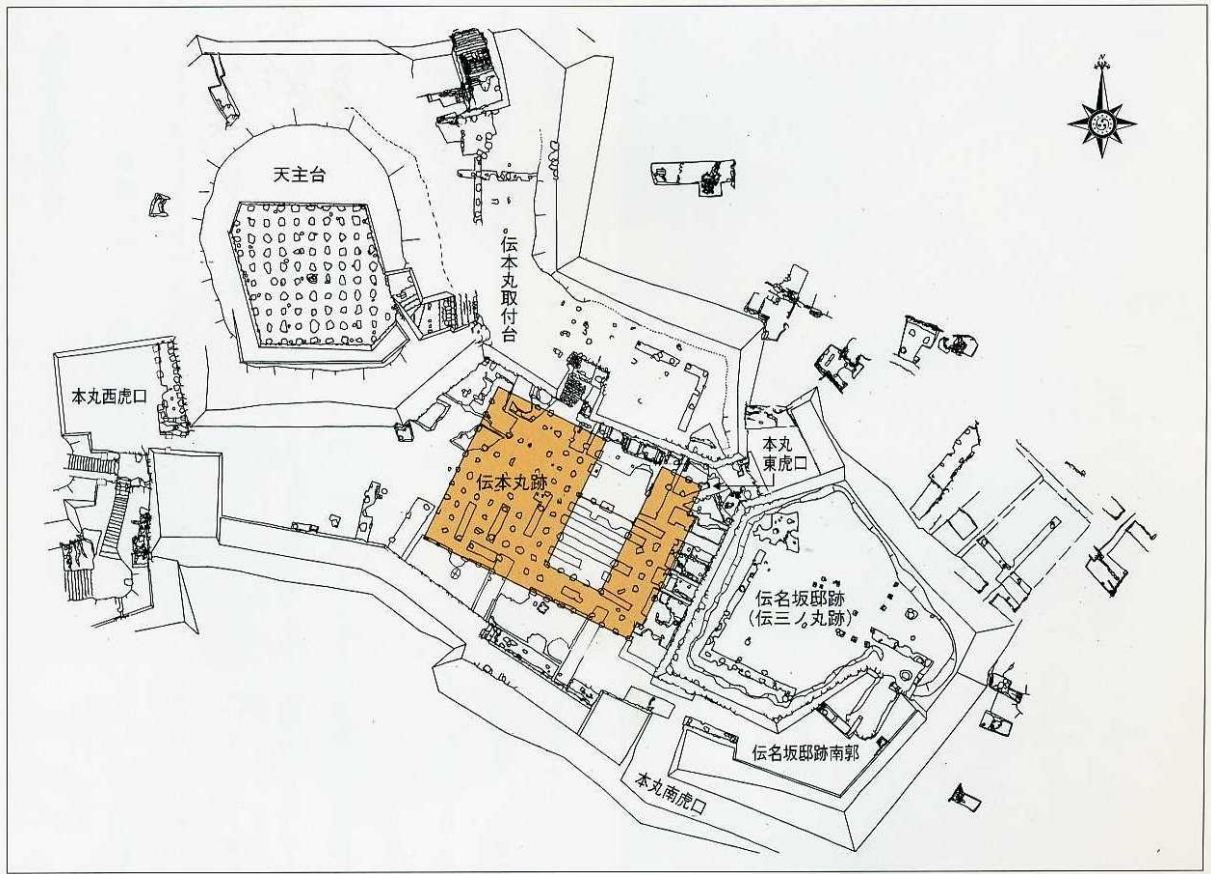


PL 5 安土城跡天主台穴蔵中央ピット(南西から)
『特別史跡安土城跡発掘調査報告 12』より



PL6 安土城跡天主台穴蔵中央ピット平面図および土層断面図

『特別史跡安土城跡発掘調査報告12』より転載



PL 7 安土城跡天主
台付近平面図(縮尺
不同)および調査状
況写真
下：天主台北西隅角
部検出状況(北西か
ら)



PL 8 天主台西裾部の建物跡
上：火災の痕跡
中：建物跡検出状況
下：建物の壁材検出状況

③天主台北西隅角部～天主台北面

昭和の調査では未調査の部分。

北西隅角部で崩壊した石垣石材の下から約3mの高さで残存している石垣を検出。

→鎬の隅角部の石積みの手法がよくわかる例。

石垣前面の路面を検出。⇒被熱の痕跡がない？

残存している石垣天端から天主台の形状が推測⇒不等辺七角形？（昭和の報告書のとおり）

④天主台西裾部（二の丸東溜り）

昭和の調査では未調査の部分。

激しい火災の痕跡と建物跡を検出。

焼け落ちた天主に押しつぶされた建物の跡・・・ここには何が？？

天主の一部がここに張り出していたとの見解もあるが・・・

6. 今に残された課題

◎天主台とその周辺

- ・未調査地が多く残った

特に天主台の北半（北西面～北面～東面の石垣裾部）には未調査地が多い。

天主台裾部の状況や天主台の正確な形状の把握が未完了。

天主の倒壊状況の検証が未完了。

天主は北に向かって倒壊したのでは？という推測があるが・・・

- ・穴蔵中央ピットの機能は？

形状だけではなく元来の埋土の情報がないと、遺構の機能に関する解釈は難しい。

- ・天主の礎石

柱等の建築部材の痕跡について。

- ・二の丸東溜りの機能は？

建物があつたことは間違いないが・・・

※発掘調査には新たな発見があり解決する課題は多いが、その結果の解釈で、新たな課題を

生み出す。また、どうしても調査地の制約等で不明確な部分が残る。

◎遺構の保護について

平成の調査では、新たな知見を多数得ることが出来た。

例 天主台の構造・地下の構造・穴蔵床面の構造など。



しかし天主台の遺構の残存状況に問題があることが判明した。



天主台穴蔵床面が流失していた。



遺構の「保存活用」と「保護」の両立の難しさを教えてくれた。